

鳥居の家族

目次

七章	六章	五章	四章	三章	二章	一章
摇曳	刹那	觉醒	過日	風	夢	写真

一章 写真

隆は自分の気に入った父母の写真を持っている。一枚は、写真とは思えぬほど古くなった茶色の絵。髪を御下げにした一七・八の少女の顔である。口許をきりりと締め、左の頬にえくぼがある。少し細めのまぶたから、こちらをじっと見つめる瞳が輝いている。少年の母である。

もう一枚の写真は、母のものよりかなり新しい。五十の坂に近づいた彼の父のものである。きりつとした眉毛と上品な鼻筋、それと柔らかい目が昔日の好青年を思わせるが、干からびた唇と無数の皺、それによく見ると焦点の定まっていない瞳は、意外に物寂しい印象を与える。それでも、笑っている顔なのだ。

少年の父母は縁故の仲人によって結ばれた。母はある在家の八人兄妹の長女だったから、勝ち気でしつかり者だった。気性が激しくひたむきな質だった。それゆえ快活で朗らかに見えた。……

田舎の習慣として、煩わしい結納を済ませてから、やっと婚礼の運びとなる。

その晩も婿の家で祝宴が盛大に催された。婿の屋敷は大きくて薄暗い部屋が多かった。襖を外して臨時に開設した奥の大広間には、両家の家族と親戚、それに部落近隣の者たちがぎっしり詰まっている。

席上は常のごとく一通り厳かな祝言と祝い唄から始まった。それから酒が入って来賓の緊張が溶けて来ると、笑い声が起こってくる。太鼓持ちが出て酒を注いで歩く。四方に陽気な声が響き渡る。音頭取りに合わせてお囃子だ。太鼓が鳴り、お銚子は次々と取り替えられる。台所もさながら火事場である。

さて、当日の主役である花の新郎新婦は、仕来りどうり杯を交わしてから、広間がだいぶ賑やかになった後も、しばらくは二人おとなしく着座したままめぐって来る杯を受けていたが、そろそろ新郎は新婦を離れて立ち上がった。

彼は元来じつとしているのが苦手な質で、このような日にも忙しい方が性に合うとみえ、客の間をせかせかと酒を注いでまわった。笑顔をたたえて銚子を傾け、祝い詞に頭を下げ、親しい者から出るあまり質の良くないひやかしには、白い歯並びのよい口で笑って応えた。まあまあ婿さんもどんぞもう一杯。いんやあれくらいにしておかねえどお。なぬ？ あどで困るつてがあ。はははは……。

婿はもともとそんなに酒に強くないのである。二・三人の酌で、もう目の縁が真っ赤になっている。きょうが他人の祝い日なら、いつもようにこのへんでちよいと失敬して、茶の間かどこかでごろんとひと眠りしたいところだった。しかしそうもいかぬ。彼はあたかも極上の太鼓持ちのように、懸命に客の接待に努めた。

新郎のこんな様子をよそに、花嫁は上座にひとりぼつんと神妙にしていた。飲めぬ酒のために伏せたまぶたのあたりがほんのり染まっている。きょうの彼女は人々の観賞の的になっているのだから、目を上げて夫の姿を追うこともできぬ。

はあ綺麗な嫁ごだなあや。まあんず美うつくすごどお……。

そばで見ていた彼女の母は満足そうである。そうこうしているうち、花嫁は宴席の者

に気づかれぬようにそっと立って、広間から台所へ出た。

はあ何処どこさ行いげす？——ちよつと厠かわやまんでえ……。んだんだ。少す外の空気さ当たって来たほがええ。外は涼しくてええ氣持きもちずだどお。

勝手口にいた働はたらき女をんなと彼女は何なにげなくこんな会話のやりとりをした。

座敷のドンチャン騒さわぎはいよいよ興きように入った趣おもむである。花婿むすめは幾いくらか酔よい疲つかれた顔かほをしている。他方女たがをんなたちはまだまだゆっくり腰こしを下くだろしてなどいられない。飲のみ飽あきた者ものの中には、腹はらがへつたからそろそろ飯いを運はんでくれと来る者ものもいる。赤飯あかいの櫃くや味噌汁みそじゆの鍋なべを運はぶ段たんとなった。

それから客きやくの中には、申ま訳わけねえども用足よつたしあつからそろそろこれで、と言いい出いす者ものもいる。ここで東北特有とほくとくの引ひき止とめの挨拶あいさつがある。

なんたらあもう帰かえるつてすかあ？ 今少いますこすゆっくりして行いがいやあ。まだいがすべじやあ。——いんやあほんとに用もちあつから。——なんたら今少いますこすう。——いんやあほんとぬう。きようはどうも御馳走ごちそう様さんでがした。……

引き止とめる方は客きやくがうんざりするまで腕うでを離はなさない。それから、あらためて丁寧ていねいな挨拶あいさつ

拶が二・三度繰り返される。別れてからホッと溜息をつくのは客もこちらも同様である。農村ではどんなに家が離れていても、部落内ならば互いがいわば親戚である。米や金が不足の時は借りに行く。近くを通ってちよつと寄りでもすると、酒を飲まないうちは帰されない。自分の畑でとれた野菜や作った御馳走が自家だけで食べられることはない。それは同じ部落に住む人々にとって当り前のことだった。それだけに、互いの家事情やら家庭内の喧嘩まで尽く知れ渡った。それはまた、茶の間に笑話の花を咲かせる恰好の種でもあった。

さて当夜の手伝いの女たちの中で、年かさの者は先に膝を折って休んでいた。婿の母もその一人だった。母はもともと神経質で、客への接待でへとへとになっていたから、宴席や台所は人にまかせて、姉妹たちと話しながら茶をすすっていた。とにかくほっとしたい心地だった。

ところへ、座敷へ往復している女房たちの中から、ふと、

「嫁はんは？」

という声がもれた。それに和するように数人の女が食器を洗う手を止めて振り返った。

そういえば広間にも茶の間にもさつきから見えない。そのうち、厠へ行くと言って外へ出て行ったのを思い出した者がいた。けれどもそれはかなり前の事のようにだった。

なんぼくれえ前めえやあ？——さあ十分か十五分、いんや三十分くれえだったかもしれねえす。すんません。うっかりしてすまって……。

婿の母が立ち上がった。二・三人で厠へ見に行ってもらった。しかしいなかった。家の中には無論見あたらない。それでは家の近くの何処かで夜気にあたっているのだろう。五・六人で近くを捜してもらった。電燈の弱い明かりを頼りに、闇に向かって声を掛けてみる。母屋続きの納屋と、中庭を隔てて並ぶ二つ続きの納屋の内外、鶏小屋、母屋の裏の杉林の中と畑、それから家の前の軒道へ。

ところが皆頭を振りながら戻って来た。

「じゃ？ 何処どこさ行ったべや。」

婿の母は緊張する時の癖で手が震え出した。祝言の席上から花嫁が消えた。広間では知らぬ存ぜぬと酔っぱらった親父たちが踊り興じている。婿の目はとろんとしている。彼の母はそれを見て、少しばかり呆れて息子には知らせぬ方がよいと思った。それに事

を荒立てて広間にまで騒ぎを広めるのはよくない。ここはひとまず花嫁は奥の部屋で休んでいることにしよう。しかしどうしたらよいのか見当もつかないから、ごく近い縁故の者だけを呼び寄せた。そしてコソコソ話の短い相談の結果、いくらなんでも月のないこの暗い中を、女の足でそう遠くへは行かれまいから必ず近くにいるだろうということになった。それで男衆五・六人で近辺の家や、わりに近い嫁の親戚筋の家まで足をのばすことにして出発した。彼らが門を出て分散する時、念のため近くの林や川辺、さらに川の中にも注意するよう互いに促した。

酒席のドンチャンはだいぶ衰えて来たが、まだかなりの者が酒をやっていた。席をはずして横になる者、食膳にあぐらをかいて茶をすすっている者もいた。

汗っかきな婿の母は、冷たい秋風が窓のすきまから忍び込むこの九月末に、額から吹き出る汗をしきりに手拭いでのごっている。そしてさつきから同じ言葉ばかり言っている。

「じゃっ、困ったなや。おら困ったでえ。」

台所の女たちは、広間に知られたくない母の心痛を察して、何気ない素振りですり

ていた。けれどもムンムンする喧騒と活気はどうしても沈滞しがちだった。広間とは対照的に、おぼつかない不安と緊張の気配がするのを隠せなかった。

そこへキツポウが飛び込んで来た。姿をくramました花嫁は妹の嫁ぎ先にいた。そこは婿の家から二キロほど隔たっている。男衆の話によると、すぐ戻るよう伝えたが奥へ入ったまま出て来ない。その家の者に事情を尋ねると、彼女が玄関にひよっこり現れた時から、泣いてばかりで訳がわからない。そこでしばらく様子を見てから、こちらから知らせに行こうと話していたところだという。しかしこのまま手ぶらで帰っても説明のしようがない。それで彼女の妹に、せめて何か理由^{わけ}を聞いてくれまいかと頼んだ。引き受けた妹は、うんとは言ったものの浮かぬ顔つきで、姉の泣き声のする奥座敷へ入って行った。しばらくして戻った彼女は、何遍尋ねても姉は泣きながら同じ文句を繰り返しているだけだという。

「おら、おらあの家さふさわしくねえ。」

何気にくわねのやあ？ 頼むがらどんぞ戻ってけろ。なあでえ。戻ってけろ。声をかみしめて泣き続ける花嫁に泣いて頼む婿の母。頭を下げて何度も声を掛ける。そのやり

とりの痛々しさを目にして、そばにいた者たちは、花嫁を穏やかに説得し始めた。……

厠へ行くといって外へ出たものの、納屋のはずれにある厠の前まで来て、彼女は立ち止まってしまった。体がほてって頭がボーッとしていたのが、外の冷気で一度に引けて行った。少し涼し過ぎる秋の夜気は、彼女には快かった。彼女はまず、目醒めたばかりの幼児のように気落ちよさそうに両手を伸ばして、甘く突き刺すような大気を深々と吸い込んだ。さつきまであんなに厠へ行きかかったのが、ウソのように感じられた。祝言の席の緊張とそれに続く騒々しい酒宴は、神経をくたくたに疲れさせた。花婿は既に隣席の人ではなかった。彼女はじつとうつむいた姿勢でいたが、喧騒の中での長時間の孤座は必ずしも性にあわず、心の中を様々な切れ切れの思いが駆けめぐっていた。緊張しているうちはまだよいが、気が緩んでくると、時が経つほどに疲れを覚えて来た。顔を上げちよっと体を動かして、気分をあらためたかったが、そうすることは恥ずべき行為に思われた。宴席で口にさせられた馴れないアルコールのせいで、喉がヒリヒリしたが、

勧められても何にも箸をつける気になれなかった。人々から始終尽く注視されているように、奇妙に気恥ずかしかった。わずかな一挙動にさえ、彼女は自身でこだわった。少しでもくつろぐには、彼女は勝ち気過ぎる女だった。ただ、せめて一息だけ大きく深呼吸吸したいものだと思った。そうでないと息が詰まってしかたがなかった。そのためにはどうしても席を外さねばならない。厠を思い立ったのはもともとこれが理由だった。とはいえ、いよいよそつと席を立って広間を出た時には、本当に厠へ行くつもりだったから、台所での応答も嘘ではなかった。

下駄で踏まれた庭の雑草に、そつと手を触れてみると、冷たい感触が体全体に浸み渡った。空を仰ぐと星が冴えている。喜びとかすかな幸福の予感が、自分を大きく包んでいるのが感じられたが、今この瞬間の、生き生きしたくつろぎの中で、彼女は何か一点のもの淋しい不安に打たれた。

この思いは何だろう。自分は今幸福の絶頂にいないか……。

しばらく外気の中に立っていると今度は寒けがして来た。彼女はそれには構わず、自分の心の薄暗がり確かめるように、母屋の賑やかな明かりから別れて、下駄の音に気

を配りながら静かに庭を出た。屋敷の門を出て数歩行くと、田んぼの畔あぜの刈り取られた草が、夜露に濡れているのがわかった。解き放たれた心地のする今、何故かわからぬが、何か不安なものが無性にこみ上げて来て、抑えることができずに彼女を苦しめ出した。

遠くに目をやると、まばらに光る家の明かりが螢のようである。彼女が夜路にほつんと立って、それらにぼんやり目をやっていると、いつかしら暗がりの中に、つい先日までの自分が現れて来て、彼女を方をじっと見つめている。

彼女は御下げがとつてもよく似合うと誉められた少女だった。ぽっちゃりした色白で、左の頬に笑くぼがある。ただほんの少しおてんばで、木登りと駆けっこが得意である。弟妹たちに負けないばかりか、小学校の頃は同級生の男子にも容易に負けなかった。負けるとかやしくて、その日は家へ帰ってから泣いた。それに勉強だって優等だった。年をとるにつれて、母があんまりとがめるから、少しはおとなしくなったけれどなんのその。狭い家中に響いて柱がきしむうらい、甲高い声で笑っていたし、もう二十歳になるのに、ついこのあいだまで兄妹中の誰にも相撲に負けぬのを誇りにしていたのだ。しっかり者の姉さんはこのように弟妹たちを統制していた。

結婚の話もそろそろ出て来て、幾らか心が躍ったとはいえ、母の前ではウツトウしいとばかりに耳をかさなかった。早く片付いてしまうのもしかただし、もう少しゆっくり母のそばにいたい。妹は先に片付いてしまったけれど、自分はこのんびりしていたい。それに、嫁に行く相手があのような男たちではいやだ。母がそれを察して、相手方へ丁重に断ってくれたのは嬉しかった。

けれども今度は違う。母にあの人はどうだと聞かれて、返事を濁していたら、母っちらすぐ向こうへオーケーしたらしい。全く母にはこちらの気持ちが見えぬままに思わす引

見合いの席ではじめて彼をちらっと見上げた時、落ち着き払って澄んだ目に思わす引きつけられた。濃い眉毛と整った唇が男らしい。ぼーっとなつてうつむいた顔を上げることができなかつた。ゆっくりとした物腰で何か二言三言話しかけられたけれど、まるで耳に入らなかつた。ただ、頬が赤いのを気取られたかと思うと、口惜しい。で、なおさら無性に恥ずかしくなかつた……。その時の光景を思い出した彼女は、少しばかり頬を染めてちよつと微笑した。

こちらはよくとも、あちらが断わるに決まっていると思っていいたら、母から意外な返

事を告げられた。その晩からきょうまで数ヶ月、寝苦しかった。

『あの人はおらのどごが気に入って、おらどごほしいんだべえ？ いや！気に入って当然だべ。おら自慢じゃねえども皆に好かれる質だすう器量だつて……まあまあだすう……』

出発を約束された喜びは彼女を甘く包んだが、同じくらいの不安も彼女を時折悩ませた。それは交互に起こっては消えた。

彼女は野原を駆けていた。後から男が追い掛けて来た。彼女は嬉しさを抑えながら、彼に捉まるまいと懸命に逃げた。けれども男の足にはかなわない。腕を握られて真っ青な香ばしい草の上に倒れた。息を切らせて見上げると、青い海に白い小舟が戯れている。そしてその中央に、海よりもはるかに澄んだ二つの透き通る瞳が、静かに彼女を見下ろしていた。夢はいつもここまでだった。

また、幾度も、純白の花嫁衣装の姿で彼の家の門をくぐる夢を見た。人々は美しい花嫁を賛嘆し合った。父母は満足げな内にも、ちよつと寂しそうに見つめている。そして、
当の相手の花婿は？ この晴れの日に、彼は何処にいて彼女を出迎え、どんな表情でい

るだろう。夢はいつもここで引っ掛かった。彼女は焦った。いくら捜しても彼が見つからない。もどかしげな目つきで、懸命に彼の姿を追い求めたあげく、ぜったいいやだと断った男が突然眼前に現れて、花嫁姿の彼女を迎えることもあった。だから、汗をタラタラ流してやっと彼を見つけた時には嬉しくて、それになんだか怖くて涙が止まらなかつた。彼は真正面にいた。門の中央に毅然と立って彼女を見つめていた。

彼女はこんな夢ばかり見続けた。それで自ずと日中でも時々塞ぎ込むようになった。ぼんやりした眼差しで、しばらく不安顔でいるかと思うと、ふいに笑い出して弟妹たちと暴れ出す。家族は彼女に病気かと尋ねた。ここ数日は殊に、鏡を見ても頬がこけて見える。こんなに痩せて――とまでは誰も言ってくれないが……。

ところが、実際にきょうはじめてこの家の門をくぐった時、今までそんなに気にも留めなかった不安が、不測の重量をもって彼女を深く捉えたのだった。

彼女は田んぼにそって歩いてきた暗い路を引き返した。夜露で足袋がすっかり濡れていた。こごえが全身に染み込んでいる。心の中はのしかかる不安の謎を必死に探っていた。門の近くまで来た時、無数の人声が小さく響く太鼓の音に交じって聞こえて来た。

あの騒ぎは彼女のお祝いの騒ぎである。あの中にきょうから夫となるべき人がいた。それとその母も、彼女の両親もいるはずだった……。

星が冴々と輝いている。彼女は自分を奮い立たせでもするように、深々と息を吸い込もうと上体をそらせかけた。その瞬間、何かに押しつぶされる気配を感じて、反射的にあどずさりした。けれども空には、彼女を怖れさせる何物もなかった。彼女の視界を阻んだのは、その下にある大きな家の影ばかりだった。煉瓦作りの大きな屋根から杉林の頂がのぞいていて、それが上空の風に乗って揺らいでいる。彼女の目には、それらが妖気を発してうごめいている暗黒の魔物のように一瞬映った。彼女はその不気味な圧迫に対して、発作的に目を伏せた。

ここで、今夜から一生暮らすのだ。家事の一切はもとより、家畜から田畑の仕事まで、働き尽くせぬほどの仕事がある。あすから自分に課せられるに違いない。それに耐え得ようか？ それに、祝言の席に厳しく座っていた人に、あすから毎朝毎晩監視されるだろう。それに我慢できようか？ ……避け難い重圧のひとつひとつが、彼女の胸深くえぐって来た。彼女はぐらついて、それを支えるように体の向きを変え、もと来た路へ引き返し

た。

自分はトンマだった。妻になることばかりに思いを馳せて、嫁になることの意味を考えなかった。

母を呼んでいまの動揺を訴えたいが、そんな恥知らずはできない。それに、それではあまりに情けなからう。彼女は喉から出かかった母という言葉をグツと呑み込んだ。

足取りが自然と早まった。知らぬ間に頬が濡れていた。

ではあの人？ ……確かにそれまで、彼女の中で彼はまぶしかった。無我夢中での結婚に飛びついた時、彼女に堅い意志と決意があった。しかしそれには、夫になる男に対する無条件で、いわば盲目的な求愛の期待があった。

だが今の今、酒宴の席にいる婿は、彼女を失望させた。現実的には、彼はきょうまで彼女に対して、冷淡で無言の時が多かった。彼女はそれを好ましくさえ思っていたのだが、今はたまらなく失望させるだけだった。

本当のホントに彼は、嫁になる女のことをどれだけ真面目に思ってくれているだろう？ 今までそれを示す仕草を何か見せてくれただろうか？ ほんのちよつとでも言

つてくれたか？ 祝宴の席でもあの通り、彼は忙しげに立ち上がって酒盛りに加わった。まるで彼女にかまっている暇などないかのようには、人々の間で笑い興じていた。そこには彼女を気にかけている様子が毛ほども感じられない。寧ろこちらが怨めしく思うほど、すっかり忘れられている。たぶん結婚後もそうだろう。

あるいは、彼女がいらないのに気づいて、宴席からひとり抜け出て来るかな？ 心配のあまり……。彼女はそのような彼をきょうまで思い描いていた。しかし、ありえない。あつてほしい、あらねばならぬと思ひ詰めれば詰めるほど、彼女は絶望的に心が冷えて行くのを感じた。後を振り返って闇の気配をうかがう勇気が出ない。フン！誰が来るもんか。彼はとつと彼女のことなど忘れているに違いない。今夜の酒宴だって彼のためのお祝いだもの。少なくとも彼の家の祝い事だもの。

夜路をただ前へずんずん進む彼女の足取りがますます急ぎ足になった。感情が高揚するほどに、それは小走りになった。

何処へ行く？ ふと立ち止まって振り返ると、彼の家が見えない所まで来ていた。彼女は軽い目まいと激しい動悸を覚えた。涙が止まらない。さあ、どうしよう？ ……足

が家へ戻るのをいやがっている。また、そろそろと前へ歩き出した。しばらくして、その方角に妹の嫁いだ家があるのに気づいた。……

廁へと言って出てから一時間余り経た後、花嫁は化粧直しをして席へ戻った。花婿は少し飲み過ぎたので、激しい頭痛に悩まされていた。いつもならすぐ床に入りたところだが、今夜はそうも行かぬから、まだようやくのことで起きていた。妻のことは無論知らない。頭痛の不快と眠気との戦いで彼は半ばうなだれていた。が、客の多くが引けてから出来事を知って驚かされ、胸がキューツと冷えて行く思いをさせられた。……

新しい夫婦はこうして出発した。それは決して珍しいことでもなんでもない。その後、生活はどの家とも同じテンポで進行した。はじめのうち夫は気性の激しい妻に寛大で慎重な態度をとった。彼の母も家事に口うるさくいうのを控え目にした。だから若いでき

たての主婦は、覚束なくも穏やかなスタートを切った。

けれどもなかなか子供のできる様子がなかった。妻はそれを恥じて塞ぎがちになった。夫は彼女を励まして幾度も病院へ連れて行った。一年後やっと身重になったが、あいにく死産だった。彼女はスマナイ、スマナイと何日も泣き続けた。二度めに男の子が生まれ、祝福された。数年後またひとり男児を生んだ。彼女は子供らを撫でるように育てた。

歳月は彼女に主婦の匂いを染み付けた。彼女はそれに馴染んだ。怖れ、苦痛に思っていたもの一つ一つに耐え、一つ一つを受け入れて、いつかしらそれを守る側に立っていた。それを可能にしたのは、ひと口によって、炎の消えることを知らない彼女の熱情だった。しかし同時に彼女は、正にそれによって、しばしば自らを苦しめた。夫は外に出る人であり、当然多くの人々と接する機会があった。

この世で夫と口を交わす女が自分一人だけならどんなにいいだろう。だが不可能である。彼女はほんのわずかな噂にも、夫を疑い、激しい嫉妬に燃えた。それは子供ができ、年を増すごとに激しくなった。というのも、彼女は夫の「過失」の確かな噂を一度耳に

したのだった。夫にとってそれはただ一度のはずみであり、それをどんなに心中で後悔しても、妻は性格上いつまでもこだわった。

それに夫は彼女を冷淡に扱っていたから、詫びたりすることはありえなかった。おまけに思い立ったら潔癖な質の男だから、こだわられると、かえって応対が邪険になった。彼女もそれに負けまいとした。彼女は日に何回となく夫に殴られた。それでも、それを望みさえするように夫に向かった。

彼女は何がほしかったのか？ 済んでしまった「過失」は仕方がないだろう。どうしてもそれを許せぬなら、別れるしかない。しかしそうではなかった。彼女が夫に激しく求めたものは、実に簡単だった。ほんのたまにでよいから、あるいはちよつとしたはずみにもよいから、優しい労りの言葉で話し掛けてほしいだけだった。（それがないとどうしても、他の女にはそうしているに違いないと思ってしまうものである。）

しかし夫はそれができない質だった。だから非常に冷淡にみえることがあった。（実は大へんなはにかみ屋だったことにもなる。）無論、優しい言葉や動作は、そのまま愛とはいえない。人から溢れ出るものは、その眼差しと挙動とによって充分うかがえる。

優しく甘い言葉の出る口には、棘のあることが多い。かえって、ごつごつしたそっけない言葉の中に、味わい深いものが多いことがよくある。だが、言葉は魔物である。そして必須のものである。人という弱い生きものは、それにすがって生きている。その力は絶大である。その働きの微妙なニュアンスだけが、人と人の結合を左右する。つまり、普段の時はどうあれ、人間にはどうしても、柔らかにホロリと優しく出る言葉が必要なのだ。それはほんの少しで構わない。でないと、心が渴いて、しだいに苦しくなってくる。

彼女が夫に求めたものは、彼の自尊心にとって与えることの不可能なものだった。したがってこの男女は、互いに自分を誠実に出せば出すほど摩擦を生じた。

どうしたら夫は、本当に優しい言葉で労ってくれるだろう？ 彼女はいつしか、こんなことさえ時々考えるようになった。

さらに、月日とともに夫の母は彼女に厳しくなった。彼女はそれを我慢したが、しばしば夫と母の間で孤独を感じた。そのような時彼女はノートをつけた。それは激しく淋しい文字で塗り潰されて、二冊三冊と積み重なって行った。

こうして彼女は心に陰を持ったが、彼女の中にある朗らかで活発な努力家は、幾度か自らの危機を乗り越えさせた。彼女は笑う時、誰よりも楽しげに高らかに笑った。周囲の人々はその明るい声に好感を持った……。

一章 夢

国道を北に遡って行くと、左手に大きな赤い鳥居の立っている所がある。九月の祭り時には、この太い柱に白い注連飾りが結ばれていた。赤い鳥居は他との境界のようだった。鳥居内の人々にとって、家の外へ着飾って出かけることは、鳥居の外の何処かへ行くのを意味した。

鳥居をくぐると一本路が続く。その二キロ半の県道は、山麓に延びる農場に突き当たった。道路の両側は杉林で、所々虫が喰ったように田畑や家が顔を現わした。農場は戦時中軍馬の飼育場だったが、戦後になって家畜を果樹・野菜栽培に切り替えた。

東北に雪は多いが、麓のせいかな鳥居をくぐると目に見えて多くなつた。冬の厳しさばかりでない。夏は堪らなく暑かった。百姓等は黒い額に汗を噴き上げ、手拭いでホッ被子りした頭へ麦藁を載せて、田んぼの草取りに精を出した。夜はどの家も、窓という窓全

てを開け放して、パント一つで寝るのが普通だった。

隆は赤い鳥居の内側で育った。林道から少し入った所に家があり、農場まで半キロとなかった。家は幾らか大きな農家であり、父は教師をしながら、人手を雇って農業にも従事した。他に母と兄と祖父母がいた。

生後数年病弱の彼は、毎日のように母に背負われて通院した。

バスで幼稚園へ通うようになると、寝ぼけているところを毎朝母に停留所まで背負われた。それでも一日のうちで朝が一番楽しかった。冷たい大気の中で、彼は心が浮き立った。何かが待っているような、そんな感じだった。

少年の幼い心は自然と動物で占められた。美しく香りのよい花は見てもよかったが、それはそれだけだった。その神秘さにあまり興味を覚えなかった。直接の感触と何か味がいなければ、もどかしく不安だった。動くもの、動いているものに彼は興味を持った。だから、静止しているものは動かさずにいられぬほどだった。花も、風に吹かれて震えていけばそこに長く目が留まった。

バツケ（フキノトウ）が春を知らせる頃、彼は田んぼの用水路へ急いだ。片手にバツケがある。狭い川辺にツクシが無数に生えていた。まずそれを無造作にむしってバツケに入れ、それから両裾をまくった。眼下で彼の気配を感じたどじょうが水を濁らせた。彼はあたりが暗くなるのも気づかずに、どじょう捕りに熱中した。顔や服に泥んこを跳ね上げて奮戦しても、バケツのどじょうはいっぱいにならなかった。けれどもその日の夕餉^げには、きつとどじょう汁をせがんだ。それが叶うと得意になった。が、実際に御碗の中に煮られたどじょうを認めると恐くなった。それはもはや生き生きと動かず、体じゆう毛状の白黴^{かび}が生えて腐ったようだった。彼は生唾を飲み込みながら箸でそれを選び寄せて、汁だけすすっておかわりした。煮魚はどれもそうだった。鯉^{こい}も鮒^{ふな}も水の中では生き生きして頼もしい。鯉などは英雄のようだった。けれどそれが煮られて彼の前に置かれると、腐って静止している印象を与えた。そればかりかそれが、こちらにギョロりと目をむき出していると、箸をつけている途中にも、突然尾鱗^{おびれ}を振ったり口をパクパクし出すのではないかと思われた。そう思うと彼は寒けがした。だから煮魚はどれも嫌が

った。それで焼魚の真っ黒焦げにしたものばかり食べた。

この季節には、屋敷裏手の畑一面にコマツナやダイコンの花が咲いている。しかし、少年の目当てはそれではなく、傍に林立するネギだった。彼は手にした竹棹で、取り澄ました茎からネギ坊主ぼうずのあたりを痛快に切りまくった。それは毎年この頃の彼の仕事のようだった。祖母からは真っ赤になって怒られたが、こういうことはなかなかやめられなかった。またそうした悪戯わるさのせいか、腹の太い蜂やアブに毎年きまって追い回され、三度に一度は刺された。そして泣き噓じやくりながら家の中へ戻り、薬になるという歯糞を誰かに傷へつけてもらうのだった。そうでない時はオーカン塗られてさらに泣かねばならなかった。

アゲハの空中を漂う優美な翼は少年を興奮させた。彼はその触れたなら砕けてしまいそうな輝きに吸い寄せられて、何処までもついて行った。それを捉まえるのはためらわれたけれど、迷っているうちに手の届かない所へ舞い上がって行かれると、彼は傷ついた。

彼はまた犬を連れて農場へ駆けた。農場の正門から広場まで五百メートルの間、美事

な桜の老木が路の両側を埋め尽くして、一斉に咲き乱れている。時折パラパラッと粉雪のように花びらの散る下を、彼は犬といっしょに息の続く限り走った。犬の方が速かったから、先へ行くとすぐ立ち止まって彼を待っている。並んで走る時には彼の方にペースを合わせた足取りだった。彼はそれをいつも口惜しく思った。木々の間を縫って走り疲れると、それから彼らは木の下の原っぱで取っ組み合いをした。桜の花も散り尽くして紫色の小さな実の生る頃には、農場へ散歩に行くと、彼は必ず歯茎から口許、鼻頭を紫色に染めて帰った。

梅雨が訪れてイチゴの実が色付く頃になると、彼は雨の上がるのも待ち切れずに裏の小さなイチゴ畑へ急いだ。果実を踏むのを恐れながら、狭い間道を一步一步吟味してまわる。そうして食べ頃の赤く熟れたのをくまなく集めて帰ったが、橙色のやまだ青くても実の大きいものがどの辺にあるかも、頭にチャンと仕舞い込んでいた。これは少年に、兄という抜き差しならぬ競争者がいたからでもあった。三十分もするともう見に行きたくなる。まったく遊びも手につかぬほどなので、すぐ又やって来た。そうして彼は地面

に手をついて体を支え、土に頬を押しつけるようにして、低いイチゴ林の中を覗き込んだ。まだ熟しているはずもないのだが、橙の実はどうとう彼に収穫された。そればかりか、青いものでも形が大きく白味がかつたのも、ためらったが結局口の中へ仕舞った。それはそれでまたいい味がすると彼は思った。季節はこのように、少年の秘密の場所と行為いとなみを移して行った。

蟬の脱け殻を口に入れると、それはカリカリツという音がした。彼はこのカリカリツが好きだった。裏の杉林の下に、茗荷畑みょうがが緑色の太い針の山のようにあった。夏の間毎日そこへ行くと、必ず数個の脱け殻が見つかった。蟬がおんぼろラジオのように鳴り続く暑い午後、北向きの真つ暗な台所の板の間で、彼は皿に盛った蟬の脱け殻に醤油をかけて御飯といっしょに食べた。それは愉快なような得意な気分だった。

小学校へ上がり、はじめて自転車に乗って得意だった頃、それも暑苦しい一日の昼下がりがだった。彼は小さな自転車で学校から家路を急いだ。早く帰って遊びたかった。スピードを出す時の癖で、彼は上体を前へ反らせてこいだ。空気がムンムンする。強い日

射しが影で薄暗い林道に洩れて光っていた。少年の視界の遠方に何か黒いものが見えた。路の真ん中に鰻頭が置かれているみたいだ。しかも割と大きい。彼は邪魔だなど思いつつずんずん進んで行った。近くまで行ってやっと見分けがつくと、それは蛇がとぐろを巻いているのだった。彼はあわててハンドルを切り、そのまま林のやぶへ突っ込んだ。蛇はいくらか涼しい道路へ出て、通行人を見物していたらしい。彼もその時、一瞬暑さを忘れる思いだった。彼の家族は動物好きで、犬も猫も欠かさず飼っていたが、猫が蛇をくわえて来て台所でも何処でも長々と伸ばして見せるのには閉口した。兄は蛇も「可愛い」と言ったが、隆はその心理だけは理解できなかった。

蟬を捕らえて猫に見つかるのはまずかった。この雄猫は一度嗅ぎつけるとしつこかった。お産した雌猫のようにニャアニャアいいながら何処までもついて来た。彼はそれを可愛いと思ったが、蟬をやることはできなかった。この猫は、そうでなくとも、家族に信用が薄かった。普段は一日じゅうゴロゴロしていて、呼んでも返事さえしなかった。本来純白のはずの毛が、洗ってもすぐ汚れて灰色がかっている。老年のせいでもあるまいが、鼠を捕って来ることは希だった。

「あつ。シロがネズミとつて来た！」

誰かが叫ぶと皆驚いて集まった。誰もそんなはずないと思っ
ているのだった。事実、よく見ると土龍もぐらが多かった。そ
ちの方が捕らえるのに容易らしかつた。時々雀をくわ
えて来て皆をびっくりさせたが、まさかジャンプするほど身
軽な猫でもないから、傷つ
いて地面に落ちていた鳥ではないかと疑われた。シロはまた、
手が器用だった。昼寝に飽きると、大きな欠伸あくびをしてから、戸
棚へ行った。そして得意の前片足の芸で戸棚を開け、中のおか
ずを巧みに取つた。それを見つけた祖母が真っ赤になつて叱
るのも面白かつた。そうでない時猫は、薄日射す客間の金魚鉢
の前において、それに手をつつ込んでいた。その技術も上手だ
つた。だから、父が庭に鯉の池を作つた時、隆は父の気が知
れなかつた。

赤蜻蛉とんぼが夕暮れの電線を染める頃、彼は下校時間を待ちわび
た。登下校の一キロばかりの道程みちのりは、林道であつたから、毎
日がピクニックであり冒険だつた。蛇や他の小さな獣との遭
遇の危険を冒しながら、彼は仲間と藪の中をこいでまわつた。
目ざすアケビや

ヤマブドウが先回りされていると、舌をかんで口惜しがった。それで、まだ堅いアケビでももぎとって持ち帰った。それは米櫃の中へ入れて置くと、数日で熟れた。彼はそれを毎日のぞいて確かめた。

刈り入れ時の田んぼは、放課後の彼の遊び場だった。彼は誰もいない家の中に鞆を投げ捨てると、薄暗い台所で弁当を詰めた。御飯の上へ生卵を割って丹念に醤油とかき混ぜた。それはご馳走だった。いつもなら、御飯へ味噌汁をかけたのがおやつだった。彼は弁当を持って、犬を従えて田んぼへ急いだ。畔道あぜに杭を打ちつけて見えるのは、早退して来た父である。母は数十人の手伝いの者達に交じっている。気づいた者が遠くから彼に声をかけた。母がチラッと歯を見せた。父が何か口を動かしている。たぶんまた小言だろう。それでも、彼は胸の躍りが鎮まらなかった。彼は土手に仰向けに寝っころがって空を見つめた。青い空は快かった。その不思議に吸い込む力に引かれて、彼は長いこと頭を揺らしながらそうやっていた。それから、弁当を広げて楽しみ、日が沈んで皆が田んぼから引き上げるまで、稲穂の間を犬と駆け回り、隠れんぼをしたり、イナゴ捕りに熱中していた。

雨の冷たさに震える時節がめぐって来ると、彼はカラスの鳴き声に不安を感じた。その頃には毎年のように、上空に鷹が見かけられた。彼はこの猛鳥を恐れつつ羨んだ。

「トンビは子供どごさらって行ぐずから氣イつけろや。」

彼は祖母から聞いた言葉を信じていた。道端で頭上を悠然と旋回するこの猛雄を認めると、彼は発作的に小石を拾って身構えた。そして、そのグライダーのように空中を滑降する弧線の美しさに見とれていたが、近づきでもしたらあわてて石を投げ付けて走った。木陰から頭を出して再び見上げた彼は、自分も一度でよいから鷹のように飛びたいと思った。

隆の土地では一晩のうちに雪が積もって、ふいに厳しい冬に入ることが多かった。そうした朝に父は不機嫌になったが、彼の方は心が躍った。吹雪が少し強まると、学校は必ず午前中に引けた。彼はその尋常でないのに興奮した。家へ戻るとさっそう、重ね着したセーターからへそを出したまま外へ飛び出た。鼻頭と頬が赤い。鼻水がズウズウいつている。彼は手袋から凍えた指を抜き出し、交互になめて温めた。そうして雪を転が

し、穴掘りに夢中になった。彼はまた、納屋の屋根の頂によじ登って、そこから吹雪の荒れ狂う空を見るのが好きだった。激流のように迫る吹雪は、一瞬のうちに彼を飲み込みそうだった。彼は恐怖にかられたが、同時に不思議な陶酔に浸った。それは、あらゆるものを呑み尽くす何か大きな力と向き合っている感じだった。彼はしばらくの間、両手を広げ胸を反らせて立っていた。

小一時間も経つと、さすがの少年も手足の感覚が全然なくなった。それに彼は空腹を感じた。するとすぐに火燵こたつが思い浮かぶ。母が編み物をしていて。彼は戸外で寒さを我慢している自分が急に憎らしくなった。そこで全てを打ちやっけて玄関の中へソロソロりと足を運んだ。上がり框にやっとなを落とすまではよいが、雪が詰まって長靴が脱げない。手を使わずにそれを抜こうとして、片足ずつ思いつ切り振った。長靴は雪をまき散らして吹っ飛んだ。それでどうにか感覚のない足で立ち上がった。彼はみじめな気持ちになった。それを知ってほしいと思った。戸を開ければ母が彼を見いだすはずだった。

ところが意に反して、母はほとんどスヤスヤ眠っていた。火燵台の上に腕を組み合わ

せて、それに頬を当てて眠っていた。彼は顔を歪めてその肩を揺すった。叱られることはわかっていても、母が目を覚ますまで泣くこともあった。ともかく、そうして彼は火燵にくるまった。母は容易に目を開けなかったから、彼はしばしば失望して、炭火に掛けた餅の焼けるのを待ちながら、おとなしく冷たい頬を猫の毛の中に埋めていた。それはふわふわして心地よかった。母には、目尻の所に細い皺しわが数本あった。パーマをかけた毛髪は草くたび臥れていて、それは雀の巢を思わせた。ザラザラした荒れた手は、田植えをし、草取りと肥料振りをして、稲刈りをするために傷だらけだった。荒れ果てていたが、彼はこの手に触られた時の柔らかさと、髪の匂いを知っていた。彼は体の暖まるにつれて、猫を抱いたまま眠り込んだ。フツと目覚めると、あたりは真つ暗だった。いつの間にか首まで毛布がかかっていた。台所からカタカタいう音が聞こえる。しばらくそれを聞いていた彼は、突然泣き始めた。

母は彼の心を知り尽くしているようだった。風邪の時病院でくれた薬を、彼は苦いので嫌がった。しかし、父がそばにいれば厳しく注意された。彼は父が薬を平気そうに飲

むのを不思議がった。すると、母が彼の手を引いて、コッソリ納屋へ連れて行った。そして明かりの弱い電球の下で、彼女は黙ったままいつまでもニコニコしている。

『何をくれるのかしらん?』

彼は胸をわくわくさせて、じっと母を見つめた。彼女はエプロンのポケットから黒砂糖の紙袋をゆっくり取り出して、それを包装紙に広げた白い薬とかき混ぜた。白い粉薬は黒くなった。それから、彼が目を見張っているのを横目で微笑しながら、舌の先でちよつとなめた。

「あッ、アンメえ」

ソウかすかに叫んで、顔が輝いた。彼はすぐ、ねだらずにいられなかった。

小学校行事の楽しみに春秋二回の遠足があったが、おやつを買って行ける金額は決まっていた。彼の場合、父が町へ出た折に買って来た。しかも、いつも同じものを同じくらいだった。彼にはそれが買って来る前からわかっていた。チョコレート一枚。ガム一個。キャラメル一箱。アメ玉が一袋……。彼はそれが嫌いなのでなく、ただ何の変化もない父の買い物、たまたまなく味けない貧弱なものに感じた。不平をいうと父の怒りを

まねいた。ある晩もそうだった。明日は嬉しい遠足なのに、ウキウキした気分は沈みがちである。彼はそれを父から与えられたおやつのせいにした。その折、母が彼を奥座敷へ呼び寄せた。そして襖を閉めて、ニツコリしている。何か嬉しい期待感から、彼の鼓動が鳴り出した。案の定、蒲団の間から、不思議なくらい次々とたくさんのお菓子が出て来た。彼は目をまるくして、ワツと叫びそうになった。

「シッ。お父ちゃんさはないしょ……」

母が急いで口を閉じさせた。それは厳かだった。しかし今にも吹き出しそうだった。

無論のこと、母は彼を叱ることもあった。そういう時の母は彼を差し向かいに座らせ、静かにゆっくりと説き聞かせた。その厳しさが目の色に出て、自ずから彼の胸に伝わった。時としてそれは父の怒りより効果があった。彼は守るように心掛けた。

けれども、なかなかそうもいかない場合があった。それというのも、事情が許さなかったのだ。彼は、ほぼ毎晩三・四回床を濡らした。その度に母に起こされた。たいてい消防車か水があふれている夢の途中だった。突然寒けがして目が覚めた。ぼんやりした

頭に、母の怒る声飛び交っていた。部屋の電球がまぶしかった。寝ぼけたまなこに、シーツをはいでナイロンの風呂敷を広げている母がかすんで映った。彼は裸の尻を出して、畳に立たされていた。そして、ひんやりした心地でブルブル震えていた。一度下着を汚すと、その晩はナイロンに裸の尻をのせて寝かされた。だから、彼は毎晩ナイロンをシーツにして寝た。その時の尻の冷たさといったらなかつた。彼は寒さにこごえて、母に体をまるめ寄せた。母はすでに眠っていた。彼も暖まるにつれて再び眠りに落ちて行った。ところが、夢に入るやまた消防車が走って来た。『あぶない』と、何度夢の中で叫んだことか。しかし気づいてみると、再び明るい部屋の中に裸で立っていた。母は口をキツと結んで、彼の尻をポンポン打ちながら、濡れたナイロンの後始末をしていた。父は蒲団から両手を出して新聞をジッと見上げていた。彼は父を不思議に思った。彼が起こされると、いつも新聞を見ている父を目にした。父はいつたい何時寝るのだろうかと思った。

三章 風

父は厳しかった。息子に厳格に対するだけだった。隆は父を怖れた。父の怒りはいつも激しかった。父のそばにいる時と、大抵叱られることを意味した。少なくとも積もっても、日に三発は容赦なく拳骨げんこつが飛んで来た。彼は体をコチコチにして、降りかかる不幸を数えた。痛みにまで神経がまわらなかつた。ただ完了するのを切願し、時の長いのを恨んだ。そうやって、怒号しながら拳骨の雨を降らせる父の傍で怯えていた。冬の夜など、暖かい火燵にあたって平仮名の練習をしていても、彼は少しも楽しくなかった。父が同じ火燵にいた。忙しげに自分の仕事の書類に目を通していた。が、彼の方へも注意を怠るはずはない。

「あ・い・う・え・お・か・き……」

発音しながら、繰り返しノートに練習する。途中で何度も引っ掛かった。緊張してい

るとなおさらである。すると、突然横から手が伸びて来て、彼の頭がゴツンと鳴った。

「ばがや！」

気づくと、いつの間にか父がノートをのぞいている。しかし隆には、その声がかえって災いした。怒鳴られたとたんに、ますます字を間違えた。向かい側に座っている母が笑いながら、彼にゆっくり教えた。五十音字を一通り書き終えないうちに、彼のノートはいつも涙と鼻水でふやけてしまい、おまけに鉛筆で書こうとすると破けてしまった。自分はないそう父に嫌われているのだ。彼は幾度もそう嘆いた。

父母は毎日飽きずに喧嘩していた。それは全く騒々しい運動会のようなだった。隆は実際そう思って見ていた。しかし原因が何なのかなど、彼にはぜんぜんわからなかった。朝気づくと、もう始まっていた。彼はただ、目の競走に忙しく目を奪われた。競走といても、走ることあれば、立ち止まってからみ合うこともあった。母が走り、父が追い掛ける。薄暗い台所で茶わんが割れ、鍋が投げられる。襖には穴があき、陶器が落ちて壊れた。場面が奥の床の間から縁側へ移った。隆が障子など破いたらあんなに叱ら

れるのに、いまは双方ともそれほどでもない。父は母を捕らえると、怒鳴りながら頭や身体からだを殴り、足で蹴った。母も時々わめいたが、受け身になって逃げる時、おかしいうに笑っていた。隆は離れた所から、ただボーッととして父母のやりとりを眺めた。台所なら柱の陰から。床の間なら襖の陰から。縁側なら障子の陰から顔をのぞかせた。彼は母の笑顔を不思議に思った。

朝のコースはいつも縁側が終着点だった。母はそこから裸足のまま庭へ飛び降りた。それで打ち切りだった。隆はそこですぐ洗面所へまわった。そこにはいつものように、足を洗っている母がいた。

「お母ちゃん……」

彼は母にかぼそい声をかけた。彼は母も父に好かれていないんだなと思った。しかし、母は彼を見ても、ただニコニコしているばかりだった。彼の目には、それが何か楽しそうに映った。また、それが不思議でならなかった。母は父が恐くないのか？ 父にこんなにいじめられて、どうして泣かないんだろう？

毎朝こんな具合だったから、隆は幼稚園の頃からしばしば遅刻した。幼稚園へは朝一

番のバスに乗らねば、後は昼近くのしかなかった。だからそれを逃すと、べそをかきながら近くに住む看護婦の背中におぶさって送られて行った。

父母のマラソンは朝だけではなかった。彼は母の恐い顔も知っていた。それは日暮れに現れた。丁度父の帰宅の頃合いである。玄関に父の気配がすると母は迎えに立った。母の顔は赤く上気して、目尻が少しつり上がっていた。口許がキツと結ばれている。父は戸を開けるや、まずその挑みかかる顔に出くわさねばならなかった。それから、短い口論があった。……

それでも隆は、夜は安らかに寝入ることができた。風呂の中で母とはしゃいだ後、眠い目をこすりながら床に入った。父が既に横になって新聞を広げている。隆は自分の冷たい寝巻から恐る恐る片足を出して、父の寝巻の暖に触れた。母は鏡台に向かっている。その顔が微笑して見えた。彼は鼻先に快い匂いをかいた。

家族は連れ立って外出することが殆んどなかった。父はいつも忙しい身だった。だから、家族を何処かへ見物に連れて行く暇などあり得なかった。

ところが一度、稀有なことがあった。家族がそろって赤い鳥居の外へ出かけるのは、それがはじめてだった。隆はその日、夢を見ている気がした。

春の頃だった。家族は遠い所へ行った。そこに寺がたくさんあった。その中の一つに大きな庭があった。一瞥すると、庭園はまぶしかった。隆は目を細め、長いことその風景に見とれていた。庭園の真ん中に広い池があった。それが強い日射しでキラキラ光っている。そして、そのチカチカする鏡の上を、白い羽の水鳥の群が滑っていた。池の端には形のよい岩がいくつも隆起している。それを囲むように密生していたスイセンが、白と黄色の花を一齐に開いていた。向こう岸は松林だった。その濃い緑は、目に強く迫った。風景は、彼の目に浸みた。今すぐ、砕けてしまおうのではないかと思った。

池の傍の広い野原に、無数の家族がうごめいている。隆はその喧騒に興奮した。父母たちは木陰に腰を下ろした。有頂天になってはしゃぎ出した彼を見た父は、頬を膨らませて目でたしなめた。が、それはいつもと違って柔らかかった。時々、齒並びのよい口を開けて笑いさえた。母も笑った。

彼は兄の後から跳ねまわって付いて行った。人波の中で、遊びに熱中した。そして時

々、父母の木陰へ腹を満たしに舞い戻った。

野原で遊びほうけていても、ふいに父母の姿が気になる。それで、人垣の間を急いでかきわけ、二人が見える所まで戻った。

『うん。あそこにいる。二人ちゃんという』

そうして確かめると、ソソいだした時間を取り返すように夢中で遊んだ。日が傾き家へ帰る頃には、彼は疲れて父の背中で眠った。母は何やら小声で唱歌を口ずさんでいた。

夏が近づいて来る頃、農家は背伸びした苗に肥料を振るので忙しかった。その季節には、雨がパラつき強い風の日が多かったから、仕事はなかなか進まなかった。しかしこの時期に除草剤を振らないと、後の草取りが大へんだった。百姓たちは空模様とにらめっこしながら、不機嫌な天気の間を見計らって田んぼへ出た。隆の父はこれに人手を雇わずに、空加減のよさそうな午後、学校を早く退いてやっていた。母がそれを手伝った。また、母一人ですることもあった。

隆は小学校の二年に上がっていた。午後到家へ戻ると、犬を連れて父母のいる田んぼのまわりを駆けめぐった。それに飽きると、縁側で猫と遊んだ。猫は犬が近づくと毛を逆立てて飛びかかろうとした。彼のそばではことにそうだった。それで犬の方は近づくとを遠慮して、離れた所に座ってこちらを見ていた。しかし家の外では逆だった。猫はいつも犬に追い掛けられていた。高い木の上へ逃げるのがやつのようだった。どうやら犬と猫は、それぞれの縄張りがあるらしかった。隆はこの不仲を悲しんだ。それで両方の頭を叩きながら、逆上しそうな猫と吠えつきそうな犬を無理に近寄せようとした。それは何度やっても駄目だったが、それでも少しずつ犬の方からおとなしくなってきた。猫の方はどうしてもこの犬が気に食わぬらしかった。

夕方になって、父母が戻ったらしい。納屋のあたりで話す父の声が、縁側まで響いて来た。いつもの喧嘩の口調だった。

「この薬は強つえがらな……。こっちさ取って置くがらな……。……駄目わがねえだぞう」

何やら農薬のことらしかった。母の声はしなかった。はつきりとは聞こえないが、彼は猫の腹をなでながら、父の声にビクビクしていた。

数日後の晩は、風が強かった。磨りガラスに吹きつけた風が、窓をカタカタいわせた。それに、午後から降り出した小雨が交じっていた。隆は兄とテレビを見ていた。そのうち、帰宅した父が、

「お母ちゃんは？」

と尋ねた。母は家の中に見あたらなかった。午後に出て行ったから、誰かと話し込んでいるのだろうか、と祖母が説明した。父はそうかと受け答えて、すぐ食卓についた。

時計が九時を告げた。玄関に母の気配がまだない。隆は少し眠くなった。父がまた祖母に尋ねた。おおかた親戚へでもまわっているのだろうか、ともいった。さあ子供は寝ろ寝ろと叱って祖母に蒲団を敷かせた。隆は奥の六畳へ追いやられた。しかしすぐ眠り込むことはできなかった。隣の八畳の部屋に縁側がついている。それは大きな磨りガラスで外から仕切つてあるだけなので、風の鳴らす音がうるさかった。それに冷たい寝巻が容易に暖まらなかった。それでもじっとしているうちに、いつかウトウトしていた。

その時父の怒鳴る声で、入ったばかりの夢が破られた。母を呼ぶ声だった。隆は跳ね

起きた。襖を開けると、風が入って来た。父が縁側のガラス戸を開けていたからだだった。隆は雨交じりの風にブルツと震えた。父のそばに祖母と兄がかがんでいる。父は母の名をしきりに呼んでいる。隆もそこへ駆けた。そして、ガラス戸の外に倒れた母を見出だした。片手をどうにか戸にあて、肩を父に支えられてぐったりとなっていた。衣服は無論ずぶ濡れで、全身泥まみれだった。それよりも彼は、母の顔を見てまたブルツとした。きつく閉じた目から涙が止めどなく流れて、しきりに唾液を吐き出していた。彼はその時はじめて、苦痛に歪んだ母の顔を目にした。

「痛え。痛でえ。ああ痛でえ……」

母はすぐ床に移された。祖母が濡れたタオルを持って来た。隆らはただ、傍でおびえていた。父が母の肩をゆすり、頬を叩き、しきりに同じことを聞く。

「何した？ 何したのや？」

「薬でえ……。薬でえ……」

「どこ痛え？ どこ痛？」

「頭。頭痛え……。目痛え……。腕も……。……身体中……」

のぞくと、母の顔が真っ赤だった。じっとしていられぬようで、絶えず顔を左右に振った。暑くてたまらぬらしい。父が幾度も汗をぬぐってやった。

タクシーで病院へ運んだ。ベッドに移され酸素が口にかけられてからは、母はおとなしくなった。むずがって無理について来た兄弟は、ベッドのそばにいて、忙しく出入りする白衣の看護婦たちに気をとられた。父は病室の外にいた。母の表情がおだやかになったのを見て、隆はいくらか緊張がとけた。

十分ほどして、看護婦がふと、母の口から吸入器をはずした。そして湿った綿で唇を濡らし出した。

「ボクたちもつけてあげなさい。お母ちゃん死んだのよ」

兄がまず泣き出した。隆はボーッとしていたが、それから兄に合わせて泣き出した。

彼は死ぬということについて既に知っていた。幼稚園の時、祖父の死に出会っていた。棺桶の中に閉じこもって動かない、むつつりした祖父の顔は恐くて近づけなかった。それは今すぐ、いいつけて、いつもの言葉を言い出しかねなかった。

『坊ぼう。いい子だからな。茶わんさ酒さけっこもって来お』

だから、人々が泣いていても、祖父の死顔は恐いだけだった。

母の死顔はそうではなかった。さっきまでの顔の印象が彼に強く働いていたためか、彼はその眠りの深い顔に見とれていた。とはいえ兄といっしょに唇を濡らしているうちに、いつの間にか泣きじゃくっていた。

『お父ちゃんは？』

病室を出てみると、父は誰かと話していた。椅子に腰かけて、両手で頬をかかえ、神経質に動く目を廊下の一点に据えて、ボソボソつぶやいている。彼は父へ駆け寄ろうとした。

「あっちへ行つてなさい」

彼に気づいた父の声で、彼はハッと立ち止まって病室へ戻った。いま目にしたもののために、彼の鼓動が早くなり出した。それは父のそばに警官を見つけたことだった。

『あの警察のおじさん、きつとお父ちゃんを連れて行くう。あの人はお父ちゃんをつかまえに来たんだ。お父ちゃんが連れて行かれるう……』

嵐のような感情が、ふいに彼をおそつて息苦しくさせた。彼はそれを兄に告げようと

思ったが、声にならなかった。

葬式の日、棺桶の母を見ても、恐くなかった。だいぶ青白くなり、鼻と耳に綿を詰め
てあったが、それはかすかに微笑しているようだった。彼は離れた所からぼんやり眺め
ていた。

親戚の伯母たちは、彼ら兄弟をすかして慰めた。

「タガスう、タガスはお母ちゃんの死んだ日に、出で来お母ちゃんさ、お母ちゃんど
ごさ行くのって聞いたってなあ？」

「うん？ おら知らねえ……」

親類たちの内輪話が隆の耳にからみついて来た。

「あのよう。筆筒の中なががらよう。兄弟さ分げでやってくださいって、紙切れとお金が
出で来たったでしょう。ふーん……」

隆はすかさず、くれろと言いかかって、黙ってしまった。それは、葬式の日に行儀悪
いことに思われた。

その夜、兄弟ははじめて父といっしょに風呂に入った。父は両手で二人を抱いて膝に座らせた。そして彼らに、いつになく穏やかに諭す口調で語った。

「いいがあ？ お母ちゃんがいねがらって、あいつはお母ちゃんがいねがらどうのこののと、陰でいわれねえようにするんだぞ」

「うん……」

隆らは、とにかく父と風呂に入っている嬉しさに、はしゃいだ。

お通夜が済むと、家の中が静かになった。父は母の筆筒を整理していた。兄弟はそれを傍で見ていた。

「あつ、お父ちゃんいいものめっけだなあ。こいづはめっけものしたなあ」

父がニヤニヤしながら、兄弟に五十円玉を見せた。隆はそれを、目の前の一番いいおかずを取られたような気持ちで、口をとがらせながら嬉しそうな父の顔を見つめた。それから父は、額に入った母の写真をはずして、何か切り取った紙をはさみ込んだ。隆はそれがなんだかよくわからなかった。が、たぶん新聞の切りぬきだろうと思った。それは

先日、叔母が祖母に読んで聞かせていた、母の記事のことだった。それも彼には、いくらかしか印象に残っていない。

『○○さんの妻A子さん、風の強い中、田んぼで農薬をまいている途中、農薬を吸い……全身に薬がまわり……どうにか這^はって家までついたが……のため〇時〇分死亡した』

それを耳にした時、ある記憶が彼をおそった。それは夕暮れ時だった。彼は縁側で猫と遊んでいた。すると向こうから父の声が響いて来た。ノウヤクというのだけを覚えていた。それがこだまのように聞こえた。

しかし、そういうこともすぐに忘れた。チラッと何か心^{こゝろ}に蘇っても、次の瞬間には他のことに気を取られてしまうのが常だった。まして考えめぐらすことなど、幼い心にはありえなかった。

四章 過日

家族から母の姿が消えた。しかし、隆にはあまりピンとこなかった。学校で仲間や先生にいわれた時、しばらくポカンとするだけだった。しつこく口にされると、かえって不安になった。

母の仕事は全て祖母がした。隆は父と祖母に、交互に抱かれて寝るようになった。はじめのうち、よく父の寝巻へもぐり込んだ。その暖が嬉しくてたまらなかった。父の枕のカバーは、真っ黒に汚れるまで使われた。祖母はそこまで気づかないようだった。父も平気だった。隆はこの枕の匂いが好きだった。整髪油の匂いらしかったが、父全体もそのような匂いがした。とはいえ、母が亡くなったからといって、息子への父の厳しさが特に変わることはなかった。

父は戦争直後の教員不足の折に、人から頼まれて教師になった口だった。それを嫌々続けるうちに、生涯の職にしてしまった。

「少しの間手伝うだけのつもりだった……」

こう何度も家族にもらした。しかし、この職は性に合っていたことも確からしい。隆の目に映る父は、いつも自信と誇りそのものだった。

二十歳を越したばかりの中学校の青年教師は、活気あふれて頼もしく見えた。その上、何処の誰にでも気軽に話しかけた。それで当然生徒が寄って来た。彼は自分の熱意を信じた。

この教師は何よりも世話好きだった。学校業務もどんどん引き受けるようになった。頼まれると、役場へでも委員会へでもせつせと足を運んで、教育設備改善などに力をふるった。校長は彼の力量を認めた。仲間は一目置くようになった。狭い地域ではあったが、十数年と経たぬうちに、彼の名は何処へ行っても知られるようになった。彼はいつの間にか、校長の仕事のほとんどを自分でやっていた。

「校長が毎日暇そうに、校長室で新聞を広げてるが、他の職員が陰でブツブツ言っ

てるもんや……」

彼は食卓で家族にこうもらすことがあった。校区の分校から分校へ、毎日忙しくまわり歩く彼が、土地の人々とも親しく話を交わし、校長よりも名を知られるのは当然だった。

彼はまた、部落の人たちの相談相手でもあった。百姓たちは出勤前の彼に会おうと朝早くやって来た。彼は眠っている所を起こされたが、それでも、悩みをかかえてやって来る彼らに快く応対した。彼は人に決して不快な顔を見せぬ人物だった。誰が訪ねて来ても、いつも嬉しそうな笑顔で迎えた。

彼を妬んで陰口する者もいたが、彼はひるまなかつた。それは自分の社会的潔癖さと、善良な正直さを信じていたからだ。そして、多くの人から尊敬と信頼を寄せられていたからでもあった。東奔西走する自分の心に、裏の思惑のないことだけが、彼の信条だった。特に妻の死後、子供たちを置いて遠くへ転任する意思のない彼は、自分の土地で頑張りたかった。それで、教育委員会にも発言力のある彼は、長い間なんとかその無理を押し通した。それためにも、無心で精力的に立ち働いた。

隆の見て知っている父は、生徒のいない学校に勤めている教師のようだった。そして、その先生は多くの人々から信頼されていた。

「お父ちゃんくれえ立派な先生いねんだがら、おめえも先生になって、お父ちゃんのようになるんだぞな」

これは祖母の口癖だった。言われる度に隆は口をとがらせて黙ったが、立派な教師とは父のような人だと信じていたのも確かだった。それは毎日忙しく地域中を駆けずりまわる人だった。父が家でする話には生徒のことが殆んど出て来なかった。隆は中学に進む頃まで、父が学校で何の教科を受け持っているのか知らなかった。生徒に何か教えているとは思えなかった。父の食卓での話題は、いつも学校の政治的執務に限られていた。彼はそれを、忙しくて生徒を相手にする暇がないのだろうぐらいに思っていた。たまに「生徒」という言葉が口から出る晩は、きまって生徒の不始末の事柄で教育委員会に顔出しして来た時だった。隆はその時にだけ、父の学校にも生徒がいるノダナと思った。それで、教師の仕事で多忙な父を煩わすそれ等の生徒を、チヨット憎らしく思った。

しかし父はチャント理科を教えていた。試験の答案用紙を持って来て、隆の兄に採点の手伝いをさせていた。採点中の父はかすかな苦渋と倦怠に満ちていた。対照的に、兄は気に入っている様子だった。隆がのぞくと、パズルのような記号合わせをしていた。彼もせがんだが、父はおまえはまだ駄目だといった。後によく許可が出て、隆も仰せつかるようになった。彼は採点を済ませて父の喜ぶ顔を見るのが楽しみだった。数年のうちに、彼は試験問題に見覚えがあるのに気づいた。というのも、それは前年のと同じだったからだ。前年はその前の年のをそのまま使っていた。だから何も解らない彼にも、次の年の試験の予想がついた。

父は何しろ忙しかった。机の上にはいつも書類や調書が山積みになっていた。

父は息子の勉強には厳しかった。父の怒りの大部分は息子の学業成績だった。兄の通信簿は異常なほど神経質な目で点検された。従って隆もそうだった。

尤も彼は、学校ではともかく、家で机に向かう気になれなかった。他の仲間同様、野原を突っ走ったり、泥んこをこねたり、いろいろな遊びで頭がいっぱいだった。それは

彼にとって父の忙しさに匹敵した。父がいて外へ遊びに出られず、仕方なく机に向かつていても、心中は戸外を飛び回っていた。決して教科書に集中などできなかった。それはアクビのする仕事だった。とにかく動きたくてしようがない。本を読んでも、ほんの少して便所へ立ちたくなる。それで、二階の子供部屋からセカセカと降りて行った。すると、待ち構えている声がある。

「タガスツ。落^つづ着^ぎねえぞツ。おんめえ十分か十五分おぎに便所さ行^ってるぞツ」
父の鋭い一喝で、彼の尿意はピタリと止んだ。それで、もう階下へ降りられぬというかすかな諦念が、彼をおとなしく机に戻らせた。が、子供心は切ないものである。もう数時間は二階から動けぬと決まると、今度は空腹が彼を攻めつけた。気になり出すと、もう止まらない。腹がへって勉強さえ手につかないような気がした。そんな時に限って、まだ残っているはずの美味しいお菓子が彼の脳裏を過ぎった。彼は生唾を飲み込んだ。すぐにも階下の戸棚へ飛んで行きたかった。けれどもそれは不可能だった。階段に一歩足をつけるや、階下の厳しい監視の気配を感じて、足がすくんだ。彼は階下に臨むと、
自ずから緊張を覚えた。

父が家にいる日曜日などは、いつもこのような具合だった。また、庭仕事している父が手伝いを命じることもあった。そういわれると、今度は宿題が気にかかるのだった。

「おらあ。いま、あしたまでの宿題してるものお。いそがすじゃあ……」

二階の窓から、恐る恐る父に告げたが、認められるはずもなかった。父の言いつけは絶対のものだった。

「タガスはナヌがあ？ お父ちゃんさ助けるのやんたがら、宿題っていうんだべえ？
いっそッ頼んだ時どきばり、宿題って……」

「んでえわがったじゃ！」

彼はヤケになった。『宿題でぎねえくてもおらいいじゃ』とまで思ったが、それを言うとなお怒鳴られるので黙ってすぐ降りて行った。彼ははじめから降りて行かねばならぬことを知っていたが、いつも一度は蚊の鳴き声で抵抗した。

こうした事情から、彼は父のいない休日に関わらずに何か平安を感じた。それは無論父の帰宅までだった。

隆の通信簿の上昇下降は、父の機嫌を大きく左右した。それは年間を通じての感情生活に、組織的かつ計画的な影響を及ぼしているようだった。だからそれは、家庭の平和に尾を引いていた。隆の精神の動きもその波に乗って、一定の放物線の反復を示した。

通信簿配付の日がまだずっと先に見える間、彼は外での遊びに没頭できた。母がなくても、誰にも負けぬ快活な少年だった。家では勉強にウンザリしても、学校では好きだった。彼は教室で張り切った。嫌いな学科などなかったから、授業は活躍舞台だった。彼は本を見るのももどかしく、先生の顔ばかり注視していた。それで、質問されるのをドキドキしながら待っていた。指名されると、誤らずに答えた。先生の顔と口ほどわかりやすい教科書はなかった。そこにいつも解答の半分以上が表れていた。

給食時間ほど一日のうちで、甘い思いのするひと時はなかった。彼は白い大きなエプロンが恥ずかしくて、当番が嫌だったが、それに当たると胸がワクワクした。そして、小さな手で懸命になって平等に配分した。この時間は先生の笑顔が絶えない。スピーカーからいつもの音楽が流れて来る。流れるような踊るようなリズムが教室の空気に染み込んだ。

「みんな、この曲知ってる？」
先生の質問に誰も答えられなかった。

「花のワルツね。チャイコフスキーの」

それを聞いても、チャイコフスキーが人の名前とは気づかなかったが、彼は、両方好きになった。このメロディを聞かない一日はもの足らなかつた。

学芸会や運動会にも熱を上げた。彼は演じるのが上手だった。だから好きだった。というのも、彼は特に演じなくても、いつも演じているようだった。彼が何もしなくても、人は彼を面白がった。運動会では、二等になると悔しかった。その日は、祖母が寿司を巻いて来てくれた。彼は祖母にお金をねだって、露店へ駆けた。

学校での快活さは、同様の失敗も繰り返させた。

『少し活発すぎるところもあるようです』

通信簿の通信欄には、いつもこんなことが書かれていた。無理もなかった。絵の上手な隆の描いたスイセンの花が、額に入れて教室にかけてあつても、それは一週間と飾つて置かれなかつた。クラスの腕白者がボールで暴れていて、それにぶつけてメチャメチ

ヤにするからである。犯人は彼だった。彼は随分よくガラスを割った。

家に帰ると、忍者ごっこが気に入っていた。風呂敷と手拭いで変装して、納屋の暗闇や屋根の上、木々や草の間を忍び足で歩いた。敏速に。しかも誰にも気づかれぬように。ところが、それもなかなかうまくいかないのです、彼はしばしば失望した。

「タガスうだべえ？ あぶねえがらはやぐおりろよお」

屋根を忍び歩いていると、突然下から祖母の叫ぶ声があった。彼はガツカリして、トタシ屋根の不便さを恨んだ。それから、いくら叱られても手裏剣の修業をやめなかった。その結果、襖が蜂の巣のようにボロボロになった。

友だちはたくさんいたが、男友達ばかりでなかった。女の子と遊ぶのも嬉しかった。

「タカシくん、もてるもんね」

彼は友だちにならない男の子がいなかったのと同じに、どの女の子も気になった。彼女らの中で夢中になってはしゃいだ。ふざけて、みんなが笑いこぼれる顔を見るのが楽しかった。彼は英雄にもなれば、乞食にもなった。そうして、教室の隅でいつもポツンとしている子も仲間引き込んだ。

ある時そんな仲間の一人から手紙をもらった。それは家に帰って、鞆を開けた時フイに出て来たものだった。手に取って見ると、封筒の端にクラスの子の名前が書いてあった。彼はなんだかドキツとした。そしてしばらくそれをながめていた。その時、その場に父がいた。父は彼の様子を見とがめて、サツと手紙を取り上げた。

「馬鹿や！」

父が怒鳴った。手紙はその場で破り棄てられた。彼はブーツとして、泣きながらただそれを見ていた。いつものように、自分が悪いことをしたのだと思った。それで、父の拳骨の終わるのをじっと待った。

翌日、手紙をくれた子がニコニコしながら、彼に手を差し出して来た。彼ははじめなんのこともわからなかった。返事をくれという意味だと気づいた時も、どうしようもないから黙ったままだった。彼女のせつかくの手紙は読めなかったし、返事など書くことは考えられなかった。それは、父のさらに大きな怒りにふれることだった。見つかるのが恐ろしかった。

ウキウキした日々は、そう長く続かなかった。試験のない学校はないように、毎年確

実に通信簿の配られる日が来る。隆はそのひと月ほど前から落ち着かなかった。遊びほうけていても、犬と野原に飛び出しても、或る後ろめたい不安が脳裏を過ぎって胸をドキドキさせた。とたんに何もかもがつまらなくなった。明るい日射しも、いつものようには嬉しくなかった。心にどんより黒い雲がかかったようだった。学校の帰り路、ふいに恐ろしい不安にかられて立ち止まり、路上でむやみに泣くことがあった。通信簿がゆっくりした足どりで彼に近づくにつれて、日増しに父のそばにいることに怯えを感じた。彼は仲間も皆同じ思いだろうと尋ねたが、返って来る言葉に失望させられた。かっ驚いた。

「通信簿なんか、おら家いの父ちゃん見ねえよ。それに、見だつてえなんともいわねえす」

「おらなんか、見せねえもん。いいどぎばり、おら見せるんだあ。父ちゃんだつてえ見せろつていったごどなんかねえぞお。んだがら母ちゃんが学校さもらいさ来るだけだもん」

友だちが口をそろえていうことは、隆には信じられなかった。羨しくてしかたなかつ

た。彼はそういう彼らに対して、自分の不幸を説明する言葉を持たなかった。それで、彼らの話を黙って聞いていた。

恐れが彼の中で膨らみ、ズキンズキンと違って彼を苦しめた。彼は友だちとは不平等の不満をわずかに抱いたが、父の嵐の前にはわけもなく崩れた。これから、体をピリピリと硬直させて、ひとりでその嵐を忍ばなければならなかった。しかし、何かにすぎる気持ちは抑えられない。それが自然と彼の表情にあらわれた。普段学校で活発すぎる彼は、とても模範生とはいえなかった。それは担任も充分見ていた。ところが「台風の時節」が接近すると、様子が変わった。彼は教室でも元気がなくなり、おとなしくなった。心が或る悲しさで沈んでいた。本を読む先生の顔が、しだいに通信簿と重なって見えるのだった。彼の目は、自ずから祈るような眼差しになった。

家の中でも同じだった。彼はできる限り父を避けた。嵐の日まで、それに触れたくなかった。それができない食膳では、父がそばにいてというだけで、無口になった。食も進まなかった。そして時々、おずおずした視線をチラツと父に向けた。それは泥棒猫のようだった。が、それは却って悪い結果を招いた。

「なんだツタガスは？ さつきからお父ちゃんの顔ばり見でえッ
とうとう父に火をつけてしまった。

「タガスは通信簿心配なんだべえ？」

横から祖母が笑いながら説明した。

「馬鹿ばがや！」

父は益々不機嫌に怒り出すのだった。

隆の不安は、決して学業不振のためではなかった。彼の成績はいつもクラスで上位だった。にもかかわらず、彼は成績表を恐れた。ひとつ下がると、重大なことだった。また、いつまでも完璧に達していない科目があっても、まずかった。

授業参観日、教室のうしろに母たちがぎっしり詰まっている。その中には、いつも男親が数人交じっていた。しかし、隆の父がいることはなかった。彼はそれを知っていたから、不足感を覚えはしたが、いつもよりハキハキと手を挙げた。彼は廊下に群がっている父兄の間を縫って、父を探しに職員室へ行ってのぞいてみた。が、まだ来ていない。父は父兄が通信簿をもらって引き揚げる夕方頃になって、やっと現れることが多い。

た。隆はそれを待っていた。そして、父の声を聞くために、何度も職員室のそばまで行った。父はいつもの笑顔で同僚たちと談笑しているらしかった。それから、息子の担任と挨拶を交わして通信簿を受け取った。その場で開いた。

「ほう。算数が下がりましたねえ。それから、国語も……」

同僚が父に寄って来てからかっている。父は笑って済ませた。

「落ち着きのない子ですが、ひとつよろしく頼みます……」

担任に頭を下げている。おんなの先生が顔を赤くして、あわててお辞儀している。これらのことを、隆は数度職員室の廊下を通りながらチラチラッと目にした。それで、内容を想像した。

その晩、隆の前に現れた父の顔はきまっていら立っていた。父は彼を正座させた。それから、くたびれた背広の内ポケットから、二つに折った通信簿をゆっくり取り出し、息子の前に放り出した。隆はしばらくそれをジッと見つめていた。拾い上げる勇気が出なかった。父は終始黙ることから始めた。紙の中味について、すぐ何か言い出すことは決してなかった。

「なんだッ、何してる？ 見ねのがあ？」

その言葉でやっと許可が出たように、彼は恐る恐る白い紙切れに手を出し、祈るようにソツとあげた。そして、この息苦しい沈黙の中で、何に下がったために叱られるのか即座に判断し、覚悟しなければならなかった。一度に三つも四つも落ちたとなると、目前が暗くなった。父はもともと無口が苦手の質なので、いいかげんのところ、突然神経質な鋭い声を出した。

「お父ちゃんッ恥ずがすくて、タガスの通信簿もらいさ行げねえッ」
と言った。

「恥ずがすくて外歩げねえッ」

とも言った。

「タガスは駄^わ目^がねなあ……」

ともつぶやいた。

その場で父の手の届くものは、尽く父の嵐の犠牲になった。灰皿から、花瓶から。食膳ならばさらにひどかった。箸や茶碗は全て投げられ、味噌汁の入った鍋もひっくり返

され、付近一帯メチャメチャになった。その間にも、隆の頭は何度となく叩かれた。彼は体を強張らせてこれに耐えながら、頭を垂れて泣き続けた。父が席を立つても、彼だけは許可がでるまで動くことがならなかった。もう寝ろと父がいつてくれると、やっと立ち上がって、おろおろと祖母の蒲団へ入った。

父はまた、通信簿を持ったまま、遅くまで帰らぬこともあった。そういう晩は、必ず飲んでいたのである。隆は父の戻るまで待たねばならなかった。

『きつとずいぶんひどく成績が下がったが、お父ちゃんはおもせぐねえくて飲んでるんだべえ……』

じつとひざまずいたまま、彼は長い時間を過ごした。それは息苦しかった。まだかまだかとジリジリする一方、なるべく遅く来てほしかった。そして、

『まだ起きでるのがあ？ もう寝ろ』

と言われたかった。が、ありえなかった。

玄関の戸が開いた。やはりかなり酔っている。父はビクビクしている息子を認めるや、その前へ通信簿をポイと放り投げ、大抵さっさと床に入ってしまうのだった。隆にとっ

てはそれからがホントに長かった。彼は家の中が寝静まった後に、ひとり残された。こうして、反省の時間が課せられた。彼はめそめそ泣き続けた。時折恐ろしい緊張と震えが胸に迫った。それが通り過ぎると、全身の力が抜けてグツタリとなった。そして、そういう時彼は、涙が乾いてヒリヒリする頬や手をさすりながらポーツとしていた。その中で、どうしようもなく込み上げる切なさを、ジツと見つめていた。しばらくすると、またハツとして、緊張感に震えた。彼はまた泣き続けた。父を待つ間、ずっとこうしていた。時計の音が一つ鳴り、二つ鳴った。

「いづまでそうしてんのヤツ？ もう寝ろ」

父が起きて来てそういった。やっと、許しが出た。彼はぼんやりした頭で、疲れた体をひきずるように立たせて床へ行った。

どんなに完璧に近い成績をもらっても、父はニコリともしなかった。決して誉めることはなかった。ジロリと睨みながら、気をゆるめるなよと言った。父がこうまで息子の成績に神経を遣ったのは、その最も嫌いな陰口を恐れたからであった。息子の父は、評判の教師だった。しかも、片親だった。

隆は日に何遍となく父の笑顔を見た。毎日数人の来客があった。父は楽しそうに談笑していた。忙しい父は、帰宅して夕食後すぐ数軒の家へ電話していた。それははずんだ声だった。隆は齒並びのよい父の笑顔を見るのが好きで、いつも離れた所から眺めていた。しかし、その顔は社会に対する父の顔だった。家族に対しては殆んど見せられなかった。しばしば隆は、ポカンとした意識の中で、父のいる社会をうっすらと憎らしく思った。けれども、それはすぐにかき消された。

父は息子を甘やかさなかった。が、それは隆にはまだ通じなかった。玄関に父の帰った音がすると、普段の彼はすぐ飛んで行った。

「おかえんなさい……」

「ただあいまあ」

この瞬間の父の目は、いつも柔らかく見えた。それゆえ彼は、毎日欠かさず出迎えに駆けつけた。父はゆっくりとした物腰で板の間に鞆を下ろした。隆は目を輝かせながら、それを受け取って運んだ。時にその中に、宴会の折詰めなどが交じっていると、彼は大

喜びだった。父はきまって、何にも手をつけずに小さな菓子まで持ち帰って来るのだった。

PTAの会合の時、隆は不思議な光景を見た。その日広い講堂の中に、児童と親達がぎっしり詰まっていた。児童は前半分に、親達は後方に座を占めていた。演壇で誰かが長い演説をぶっている。たぶんそれは子供には退屈なものだった。少なくとも隆にはそうだった。彼は後ろを振り向いて、キョロキョロ目を走らせた。ほとんど全部母親だった。男の姿は、チョツと見ただけでは見あたらなかった。しかし、目をこらすと一人いた。彼の父だった。父は周囲を畏まって座っている女親に埋め尽くされて、ひとりあぐらをかいていた。父も退屈らしかった。上体をかがめて、片手でしきりに頭をかいている。父はフケ取りに没頭していた。顔を見ると、いかにもかゆくたまらんといっていた。隆は父の仕草が可笑しかった。それは、なんだか場違いの席で照れている人のようにも思われた。それで彼は、その格好が訳もなく嬉しかった。彼はウキウキしながら、何度も振り返って父を見つめた。

隆は父の勤めの学校へ泊まりに行くのが楽しみだった。忙しい身の父は、子供が休みの時も、何処へも連れて行けなかった。その代わりに自分の宿直の日、子供らを連れて行った。その日の夕暮れ、兄弟は父のスクーターに乗せられた。後ろの荷台に兄が乗って父につかまった。隆は父の股間に尻をかけた。スクーターはポンポンうなって進んだ。まるで遅かったが、それでも隆は父の下で、吹きつける風にむせた。スクーターは、途中幾度か止まった。それは故障のためでなく、路々出会う人たちが父に手をさし出すためだった。父は歯を出してブレーキをかけた。そして、話が始まった。

「やあッ。可愛い童わらすだごとお。先生の子供さんすかあ？」

「うん。童だづどご、学校さ連れでつてえ泊めんべと思もつてなあ……」

「ふうん、ああいんだ。いいんだ。」

その会話は誰と会っても同じだった。隆はその度、くすぐったい心地でおとなしくしていた。

勤め先の分校は、傾きかけた木造平家建てだった。染みついた煤や垢が校舎全体を薄

暗くしていた。ついてさっそく廊下を走ると、床板がバネのついているように弾んだ。

「こらッ。はしゃいで学校のもの壊すなよ」

とまず、彼は早々とひと睨み頂戴した。けれども夜になれば、恐くて何処へも行けなかった。父の作った料理を食べると、三人で風呂に入った。それから、狭い宿直室の蒲団に入った。その晩隆はきまって寝つけなかった。彼は明日起きたらする学校の周囲での冒険を、胸の中で次々と数えあげた。

父の怒りには、例外もあった。

隆は家の中で遊んでいると、必ず何か仕出かした。その度に、拳骨をくらった。それは不可避なものだった。それでも、翌日またやった。彼にとっては、いつも全く後の祭りだった。花瓶やガラスの類が次々と消えて行っても、仕方なかった。彼は、ただ遊んでいただけだった。それなのに、チヨチヨツと振り回した棒の近くにそれらがあつて、うまく命中して来るらしかつた。

けれども或る日、彼は致命的な仕事をした。客間のテレビの上に、陶器の飾り物があ

った。三つのうち両側の二つは、片足を耳まで持ち上げた黒と白の猫の陶器だった。父が兄弟の預金入れにと買ったもので、だいぶ以前から溜りもせず置かれていた。兄弟はそれを、もっぱら飼い猫と無理矢理睨めっこさせるのに使った。真ん中にあるのは、つい数日前から現れたものだった。父が遠い出張先から土産に買って来たもので、七福神のひとり寿老人というものだった。それは五十センチほどもある大きな陶器だった。父はそれを猫の間へ割り込ませて、満足げだった。しかし、隆はその像をはじめて見た時から、いい心地がしなかった。ただ、その大きいのに驚いた。それから、その体格を異様に感じた。寿老人は頬をたるませてニコニコしていた。長くて重そうな頭がツルツルに禿げていた。腹は、それを支えるようにデップリ突き出ていた。

『このじいさん、腹が苦しいべえ……』

彼はそう思っただけで見ていた。ともかくそれは、父が重宝にしているものだった。彼は近づかぬようにした。そうして、遊んでいても常に気にかけていた。

それでも、間違いはとうとう起きた。直接触れなかったのに、彼が近くでドタドタやる振動のために、寿老人は動いたらしかかった。彼がハッと気づいた時、陶器は傾いて、

さあこれから落ちるぞといっていた。瞬間、彼はその場に釘づけにされて、止めに走ることまでできなかった。が、寿老人も彼といっしょに止まってはくれなかった。それは、真つ逆さまに墜落して、首が砕け散った。隆は世にも怖ろしいものでも瞥見するように、ただ息をのんで傍観していた。辺りが急に静まりかえった。

日は、まだ高かった。彼はひんやりしたものを額から首筋、脇の下にかけて感じた。身体が縛られたように、しばらく立ち尽くしていた。それから、肩にドツシり重い物を載せられたように、その場に座り込んだ。眼前に横たわった寿老人は、首の欠けた所から暗い穴をのぞかせている。少し距離を置いて、まだ形を留めている禿げ頭が淋しそうにころがっていた。彼はブーツとした意識の中で、声を殺して泣き出した。父が帰れば、すぐ客間をのぞくはずだった。隆は取り返しのつかない自分の仕業の恐ろしさに、むしろ泣いた。声を出すのさえ恐ろしいので、息を吐くようにして泣き続けた。泣き疲れると、頭が酔ったようにふらふらして、無感覚な意識の中に浸った。時々フツと我に返ってはまた泣いた。

『どうしようどうしよう』と、ひとつの言葉ばかり、頭の中を駆けめぐっていた。彼

は座ったまま動けなかった。もう日が沈みかかって来たが、立ち上がる気力もなかった。彼は泣くのも思いめぐらすのにもくたびれていた。それで、涙と鼻水でベチョベチョに濡れた袖が、乾いてテカテカしているのを、見るともなく眺めていた。

父が帰って来た。隆はふいにまた神経を強張らせた。そして碎けた陶器の一点に目をやりながら、父が客間の戸を開ける音を聞いた。一瞬間、沈黙があった。それから突然、父の笑い声が響いた。父は気持ちよさそうに高らかに笑った。隆はその声に、再び泣いた。なんだか不思議な思いに打たれたためか、父に許しを請うためにか、彼ははじめて声を出して泣いた。その時の父は、彼をひと言も叱らなかった。

家の裏の杉林に、小さな墓が無数にあった。兄と隆が作ったものだった。友だちが学校の近くや山間で、傷で動けない小鳥や捨て猫などを見つけると、みんな隆に手渡した。彼はそれを家へ持ち帰った。大切に介抱してやると、数日で元気になるものもいたが、三日と生きないものも多かった。それらは裏の大きな杉の木の根元に埋められて、木片や竹の切れ端の小さな墓標が増えて行った。

犬や猫は、家族だった。父も好きと見えて、時々思い出したように可愛がった。兄弟は寢床につく時、猫を奪い合った。迷惑そうなのは、祖母ひとりだった。食事をやる当番は祖母だし、部屋に残した猫の後始末も祖母の役だったから。それに、隣近所の猫もしょっちゅう遊びに来ていた。来るもの来るものに、兄弟が餌をやるからだった。そういう猫は、日に一度顔を見せる習慣がついて、ついにこちらの飼った猫になるのもいた。

老猫のシロもそれだった。この猫は長く住みついていたが、病気にかかった。額から耳にかけて毛が抜けて、赤く腫れた皮膚にできものがあつた。薬をつけてもなおらなかつた。兄弟は、なおそれを抱いて寝た。ある日それが、アンカ炬燵の中でガスを吸って死んだ。隆が、夕暮れに遊びから帰ると、兄が泣いていた。二人は棺桶を作った。兄の指示で、隆は硬い死体を持ち上げた。兄はそれに、包帯を丁寧に巻き付けて行つた。その間じゅう、二人は、「さいなら、シロ」ばかり繰り返していた。猫の方は、頬を濡らした兄弟と無関係なように、口許がほほえんでいた。

やはり近所から貰つた子犬を、隆は踏みつぶして死なせたつことがあつた。可愛さのあまり、寢床に抱いて寝たら、翌朝ぺちゃんこになっていた。動かないのに驚いて、彼

は泣きわめきながら家の者に見せてまわった。それから、大事にしていた宝箱の中に、子犬の亡骸を入れて埋めた。

隆らは飼っていたものに死なれると、一週間ほどしよんぼりしていたが、それから、懲りずにまた飼った。

彼が小学校を出るところになって、ほんのしばらく、新しい母が来たことがあった。隆らは、その人がはじめて家の玄関をくぐった日、二階の窓の端から、カーテンで顔を隠して見ていた。目の大きい人だな、と思った。

新しい母は、優しく、静かだった。隆はその母の前で、はにかんだ。ちょっとポツとした。いっしょに風呂に入った時、真っ先にドボンと入った彼は、

「こうして、まず足を洗うんですよ」
とたしなめられた。「うん……」

それから、風呂に入る時にはいつも、汚い足が気になった。

父は隆の見ている前で、よく、新しい母の膝を枕に横になることがあった。母は父の

白髪を、無理に抜こうとした。

「まあ、随分たくさんあること……」

母は笑いながら言った。遠い街から来た母は、なまりがなかった。

「ひいッ。痛えッ。あんでえ、痛がらやめろでえ……」

父は本気で叱るように言いながら、枕が心地よさそうだった。母は、一本だけといいながら、手持ちぶさたらしくて、やめなかった。傍で笑いながら見ていた隆は、なんだか父のなまりが恥ずかしかかった。

この母は、結局、半年余りいて、里へ帰った。祖母と折り合わないためだった。隆は、その人に再び会わなかった。

彼は風の強い夜が嫌いだった。ガラス戸が激しく鳴ると、奇妙に鼓動が高ぶって来て、恐がった。そういう晩は、きまって縁側に近づけなかった。彼は、蒲団に頭を隠して寝た。

五章 覚醒

隆は中学校に進んだ。

その頃、分校は統合されて一つになった。父と息子は、同じ学校へ通うことになった。父は、長い間転任を渋って来たことから、いまだに平教員だったが、さして悔いている風でもなかった。

父は、統合校舎に二年間いた。その間、隆が職員室をのぞけば、いつでも父を見ることができた。父の席は、上座の教頭の机の隣だった。父はいつも、腕組みして何か考えていた。隆は、隣席の教頭がなんだかみすぼらしく思った。

彼は、父の同僚やクラスの者たちに、自分が誰の子か知られると、恥ずかしかった。

彼は、学校でまじめでおとなしくなった。それまでガラスを割るなど平気だった自分

が、自ずと抑制された。

彼は意識的に勉強に励んだ。家でも、自分から机に向かうようになった。放課後、剣道のクラブに入って、毎日汗を流したが、成績はトップクラスから下がらなかった。

小学校まで、いっしょに遊びまわっていた仲間からは、しだいに疎くなって行った。いつの間にか行き来しなくなったのに気づいて、時々自分で変に感じたが、すぐにそれを忘れた。なんでもないことだと、思った。しかし彼は、しばしば突然はしやぎ出して、同級生を驚かせた。

何時という境はないが、隆も、この頃から反抗期を経験した。それは、兄のまねから始まった。が、無口でおとなしい兄よりも、それは少しばかり長かった。

彼は、父に対するささいな不満にも、泣いた。父の命令は絶対だったが、息子の望みは殆んど叶えられなかった。だから、わずかな望みが胸に湧いても、すぐ否認されると予想しなければならなかった。それで、自ずと口をとがらせながら、頼みを伝えた。すると、予期どおりの返答に、やっぱりとなる。

彼は、猛烈に泣いた。以前なら、父の怒鳴る声と拳骨恐さに、ブルブルしながら声を殺して泣いたが、今は大声で泣きじゃくるようになった。父は、今度は泣くのを叱った。

「タガスはナヌ気にくわねえツ？」

彼は、父の声をかき消すように、さらに声を張り上げた。それは、しばしば声が嘎れて、体がぐったりするまで続けられた。

夕食時は、祖母が話の中心だった。これを守っていたように、祖母は父のすべき家の仕事を次々と数えあげた。それはくどかった。

「ああわがったわがった。わがったでばあ。ダレがやらねえっていったってよお？
今度の休みに必ずやってばあ……」

父のうるさそうな制止の言葉に、祖母は皺くちやになって笑った。それから、地域のうわさ話に切り替えた。父子は箸を動かしながら、それを黙々と聞いた。祖母の話は、どこまでも尽きなかった。特に、自分の息子のよい評判については、止むことがなかった。これも、しまいには父が打ち切らせた。話は、他家の子供のうわさにも及んだ。そ

れには、いつも同じ文句が付け加えられた。

「タガスう。タガスも見ならつてえお父ちゃんの子どして、恥ずがすくねえようにすんだぞなあ……」

「うるせえなあッもうわがったじゃあッなんかいいえばいいのよおう……」

彼は口をひんまげて、邪険に答えた。祖母は、また可笑しそうに笑った。

夕食後、テレビの前でグズグズしていると、父の小言がとんだ。父は、彼を二階に上げてしまわないと、不満らしかった。

父は、息子の頭を叩かなくなった。それに力を得て、隆はかみつくように口論した。

「おがすねえやつだなあッ」

父も、激しく怒った。

「タガスッ、なんたらおめえッ、お父ちゃんのいうごどきげねつてがあッ？」

祖母は、ひねくれた隆を責めた。高校生の兄は、遠くに下宿していた。家の中は、こうして毎晩、怒号と号泣が響いていた。尋ねて来て、玄関でそれを聞いたために、引き

返す者もあった。

学校での彼は、静かだった。父には、できるだけ会わないようにした。彼は、この自分が意識された。父も、学校では違って見えた。自分が別人であるように、父も、家中で夢中に反抗するときの父とは別人だった。それは、また違った意味で、近寄り難かった。

そのことは、隆に家とは別の行動をとらせた。彼は集金袋のお金を貰うのを忘れて、それを取りに職員室へ行った。そして、入口から度々中をのぞいた。父が気づくまで、そうしていた。父と目が合うと、彼は袋をかざした。すると、父がうなずいて、席を立った。内ポケットに手を入れながら、彼に近づいて来る。彼が袋をさし出す。父がそれに金を入れる。親子は、黙ったままそれをした。気づいた同僚が、ニヤニヤしていた。父もニヤニヤした。隆は受け取ると、すぐそれから逃げた。その後、集金日は、きままって職員室の入口に立った。

成績は、下がらなかつた。クラブの選手になり、生徒会の役員をしたが、彼はこの仕

事が終始何もわからなかった。それで、互いに論争していることを、ささいでつまらなく思った。

学校までは八キロあった。彼は自転車を使った。帰り道など、ブーツとしたまま、前をよく見ない癖があった。何を思うわけでもなかった。ペダルを踏むごとに、思いが移った。父が出て来ると、胸が高ぶった。

学校では、手紙の交換が流行っていた。彼は、それを羨ましげに見ていた。それで、卒業の年、自分も何かしたかった。

まず、相手を探した。それはすぐ見つかった。廊下で度々見かける女の子だった。ただ、彼女がいつもカレシらしい相手と話しているのは気になった。彼ははじめてのラブレターを、緊張して一気に書いた。ポストに投げ入れた晩は、それを悔やんだ。御飯がまずかった。返事は、すぐ来た。彼は、恐る恐る開いて、やっぱりと、つぶやいた。

別の相手を探した。今度は一つ下の女の子にした。ところが、それは、丁重に手紙を

返された。

「すみません。アタシずっと前からおもってる人がいるんです……」

「あッ、そうですっか。どうもすみません」

そのうち、或る時、友だちが彼に告げた。

「おめえどご好きなやついるぞ。いま教室さひとりで残^{のこ}ってるぞお。見さ行っかあ？」
しかし、隆は、それには用はないと思った。

『好かれても、おらが好きでないから、関係ねえべえ……』

三度め。やっと文通が成立した。それも、間にクラスの友だちが入ってくれたからだ。この、一つ年下のお嬢さんと、彼は数度手紙のやり取りをしたが、一度も話したことがなかった。彼女はささいなことまで書いてよこした。彼はその倍を書き送った。彼女の手紙は、正直だった。

クラスの友達と私は、皆で貴方のことを「先生」というあだ名で呼んでるんですよ。そしてわいわい騒ぐんですよ。だって貴方は、歩き方から態度まで、本当に先生って

感じするんですもの……

隆は、思いがけず、胸がチクリとした。

どうかお願いですから、そのあだなだけは、やめて下さい。そのあだなで呼ばれるのが、僕は一番嫌いなんです。他のだったらなんでも構いません。バケツでも雑巾でも。ですから、それだけはお払い箱にして下さい。

彼は、激しい文字で、書きなぐった。

その頃、父は、既に転勤していた。

家から鳥居までの一本道は、緩い下り坂だった。舗装してからは、その四キロの道程を、自転車のペダルを一・二度踏むだけで行けた。しかし、帰りはそのお返しが来た。

時々息を切って、ペダルをこがねばならなかった。殊に、風雨の日は難儀だった。風が吹きつけながら坂を降りて来た。自転車に乗っていても、歩く速さと同じだった。

高校に上がると、彼は毎日鳥居をくぐった。学校は、隣市にあった。

朝は忙しかった。ギリギリの時刻に自転車に飛び乗って、下り坂を飛ばした。そして、グッシヨリになりながら、発車しなかった汽車に乗り込んだ。食べ足りない朝食は、学校についてからとった。祖母の詰めた、おかずの位置まで変わらぬ弁当は、いつも昼前になくなった。

校舎は、校門から見ると、立派だった。右手に鉄筋の大きな体育館があった。これは新しかった。正面には、鉄筋二階建ての校舎が見えた。この淡黄色の建物は、二階が職員室で、下が玄関だった。これらは、学校の顔だった。しかし、その他は、木造の古い平屋だった。廊下のあちこちに、穴を覆う接ぎ板がしてあった。気をつけて歩かねば、ひっかかって転んだ。窓ガラスは、そよ風にもけたたましく鳴った。そのため、授業中に教師は、ガラス戸と喧嘩するように声を張り上げた。生徒は、それを面白がった。雨

が降ると、便所から水があふれて、歩きにくかった。古参の教師は、目を見張って、

「君たち、これはただの水じゃないぞ！ 濡れないように気をつけなさい」

と、注意した。便所の戸は、鍵の壊れたものが多かった。使用する者は、内から戸を押さえて用を足した。それでも、ノックもせずに強く引かれると、開いてしまった。

生徒は、男が多数を占めた。腰手拭いに、ボロ雑巾のような帽子を頭にのせて、下駄履き姿が、普通だった。後輩は先輩の帽子を貰い受けた。応援歌の練習は、厳しかった。新入生に、泣く者もいた。上下の礼儀は、当たり前だった。それを欠くと、先輩からその場に正座させられることもあった。

隆は、ここが好きだった。周囲は、知らない人ばかりだった。

彼は、クラスではしゃぎまわった。昼休みは、数人の弁当に手を出した。それで満腹になっても、他の弁当が目につくと、すぐ不足を感じた。休憩時間は、校舎を抜け出して、数人で近くの菓子屋へ走った。そのイカフライが目当てだった。自習時間になると、教室にジツとしていなかった。廊下を偵察してから、仲間と卓球台へ駆けつけた。

それとも、早退した。

授業は、退屈だった。それで、教師に気づかれぬように緊張しながら、居眠りに浸った。ハッキリ起きているのは、英語の時間だった。予習する時、教科書に教師の恐い顔が浮かんだ。この教師は、むっつりしたまま、淡々と授業を進めた。いまにも当てられそうで、誰も眠れなかった。廊下などで出会うと、

「おッ、タカシか？」

肉の薄い顔が、一瞬ニヤツとなる。彼は、このニヤリが好きだった。

授業を除くと、どの教師も面白かった。それで、眠らぬ時は、顔ばかり見ていた。それとも、窓の外に度々現れるリスを注視していた。あわてるのは、試験間近だった。他のクラスよりいつも低い平均点に、担任が嘆息した。

「このクラスは、明るくて、まとまりがあつてたいへんよろしい。わたしも嬉しい。他のクラスに誇れる。ただ、もう少し勉強の方も……」

いつもの柔らかい目が、悲しそうだった。隆は、赤くなった。

彼の成績は、中学の優等生から、一直線に下降路線を辿っていた。それに、ここは屈

指の進学校だった。その中で、彼が打ち込んだのは、勉強以外の全てだった。学校のあらゆる行事に、熱を入れた。クラスの議長を務めると、話し合いが混乱して、寄席になった。おとなしい級友が多かったが、それらを引っぱった。

特に、クラブには励んだ。授業が済むと、道場に急いだ。剣道場の古さは、ひとときわだった。天井や側の壁は、蜂の巣のようだった。が、稽古中、あまり怪我はしなかった。彼は、ここに礼をして入ると、心地が変わった。声が嘎れるほど吠えながら、狭い道場を跳ねまわった。

駅を出て、自転車に乗ると、彼は鈍い調子で、ペダルを踏んだ。それから、ゆっくり鳥居をくぐって、緩い坂を登って行った。前方に頓着せずに、うつむきながら進んだ。ひとこぎごとに、息を吐いた。日は、もう暮れている。無造作に足を動かしながら、彼は何も考えなかった。早く家に着きたかった。しかし、家が近づくと、鼓動が高まった。

父は、いつも遅かった。隆の前に帰宅することはなかった。転勤してからは、車で一時間以上かけて通っていた。勤め先は山の中にあつたから、冬はさらにかかった。雪深

い家から国道に出て、また深い雪の山中へ入って行かねばならなかった。

平教師の父を受け入れる側は、はじめ年齢を見て、渋った。やる側は、もらってぜったい損はないと、いった。結果的に、父は期待に応えた。閉鎖的な山中で、こまめに働いて、不備を次々に改善して行った。そして、すぐに信頼を得た。

「きょうは、教育委員会きょういぐいんかいさ行つて、便所べんじょッ水洗にするよう、談判して来たもッ」
食卓で、嬉しそうにしゃべった。それから、土地の保守性の愚痴をこぼした。

隆は、そわそわして父の帰りを待った。テレビの前にも、車の音に気を取られて落ち着かなかつた。二階で机に向かう気にもなれなかつた。父の車が家に近づく音を聞いて、やっと二階に上がる気になった。彼は、階段を駆け上った。それから、下の気配に注意を集中させた。

『いま靴を脱いでるな。板の間が上がったあ。歩き出した。疲れただといってるな。腹へった、はやく飯にしろといってる』

彼は、ジツとしていた。

「タガスうツ。ご飯だぞおーッ」

祖母が二度ほど叫んだ。彼は、まだ動かなかつた。鼓動が早まっている。本の端にぼんやり目をやっていた。

「あんでえツ。タガスよおッー。冷めっからよおーッ」

彼は、のっそり立ち上がった。そして、息を整えるように、一歩ずつギシツギシツと降りて行った。

兄は東京にいて、食卓は三人だった。祖母がひとりでしゃべつた。疲れた父は、受け答えするだけだった。隆も、押し黙っていた。父はそれに気づいて、不機嫌な顔になった。いつもの癖で、上体をかがめてせわしく箸を動かしている。

隆は、ちよつと口をつけただけで、席を立った。

「こんなのツ食えねじゃツ」

汁の中に虫を見つけると、箸を投げて怒鳴つた。

「なんだタガスツ、おめえツなぬ気にくわねえツ？」

父が興奮した。隆は、二階へ走つた。下で父がしばらく声を張り上げていた。

「ああああ、お父ちゃんおもせぐねえなあ。家さ帰けってもおもせぐねえなあ……。タガスはなぬ氣にくわねえべやあ……」

これは、父の口癖になった。時に、父と隆が口論すると、空回りに終わった。

隆は、泣かなくなった。かわりに、毎晩食卓で、父子の睨み合いが続いた。彼は、父と話さなかった。必要な時は、吐き捨てるようにしゃべった。二人は、自ずと喧嘩腰になった。

「なんだタガスッ。その目はッ。そんなにお父ちゃんどご憎にげつてがッ？」

父は、彼を嘆いた。成績は、薄っぺらなものばかりだった。反抗だけは、度を越して激しくなつて来た。

何をいわれても、隆は黙って、ぼんやり父を睨んでいた。すると、父は台所へ走った。そして、庖丁を手にして、息子へ近寄った。

「さッ殺せッ。タガスお父ちゃんどご憎にげんだべえッ。殺せッ」

父は彼に庖丁を握らせて、痩せ細った体を前へのめらせた。彼は、ボーッとしたまま動かなかった。

「あんでえッ。やめるんだでえッ。玄関さ誰が来たどお……」
小声で祖母が注意した。父はすぐ離れて、しばらく目を押さえた。戸が開いて、向こうから人が来た。

「やあッどうも……」

笑顔になった父が、客に話しかけた。隆はそれをチラッと見つめてから、客にお辞儀して引込んだ。

彼はしばしば家へ帰らずに、友人宅に泊まるようになった。はじめは、試験が近づくと、その方が勉強できるからと、父に断って出た。そのうち、何も告げずに黙ったまま、父の見えるそばで鞆に荷物を詰めた。

「なんだツタガスッ。家出でもすっ気がッ？」

「ちがうじゃッ。試験ちけ近ちけんだものツいがいんちやッ……駄目だつてがッ？」

「だれツ駄目だつていったつてよッ？ そしたらちやんと、いったらいいんでねえがッなにかッ？ タガスはお父ちゃんと話すてぐねえのがッ？」

「……おらッ知らねえじゃッ……」

犬と猫は、大事にされた。祖母を除けば、家で可愛がられた。父も、家に戻ると、猫に話しかけた。

休みの日、隆は犬を連れて、農場の原っぱへ行くのが楽しみだった。家の中では、猫がいれば、不足を感じなかった。

その猫が、ある日、ノラ犬にかみ殺された。祖母が、それを林の中で見つけた。隆はおろおろして、しばらく死体に近づけなかった。それから、ハッと気づいて、東京の兄に電話した。この猫は、兄にも可愛がられていた。

「兄ちゃんツ。兄ちゃんがツ？ あのなツアンペよお。アンペ死んだでえ。……アンペ死んだあツ。兄ちゃんツ。……」

途中で、とうとう大声で泣き出した。彼は、声がかすれるまで、兄に向かって泣いた。

「兄ちゃんツ。聞いてらがツ？ ……うん、犬にかまれでえ。……林の中さ死んでらつたあ……」

『うん。そうがあ。んでなあ、タガス。ちゃんと包帯さくるんで、棺桶さ入れてやれ

よお……』

「うん……」

アンペという名は、父がつけたものだった。ある時、貰って来た子猫の雌に、父がたった一度「アンペツ」と呼んでから、兄弟もそう呼ぶようになった。親子は、家で動物とばかり話した。

「おめだづうおがすねえ兄弟だなあ」

親戚が来ると、可笑しがられた。

夜中、長い間犬小屋の前で過ごすのも、隆の習慣だった。そうして、ジツと見つめる犬と話した。外泊に行く時、できるだけ犬を見ないようにした。目が合うと、犬小屋から離れられなかった。

「んでなツ。心配すんななツ。なしておめえ、そんな目すんのヤツ？　すぐ帰って来てばあ……」

六章 刹那

Iは、人なつつこかった。隆は彼と気が合った。はじめてクラスがいつしよになった時、双方から自然に近づいた。

Iの目は、大きかった。閉じると、パチツといいそうだった。それで、見るものが透き通された。鼻頭にできものがある、いつも赤くなっていた。大きな耳と、骨ばったあごは男らしかった。鼻の下とあご一面に、無精髭が伸びていた。彼はそれを、時々面白そうに撫でまわした。彼は、よく笑った。ニヤツとやるだけで、顔全体が狸のようだった。声をたてて笑うと、猫の欠伸のようだった。その為、何にも無頓着に見えた。温厚で優秀な彼は、誰からも好かれた。

隆は、彼に覚えがあった。中学の時から知っていた。クラブの対抗戦の時、会っていた。背の高い彼に目が留まったが、話はしなかった。地区の執行部の会合でも、見かけ

ていた。その時も、目で挨拶しただけだった。だから、高校で再会した時、二人は真先に話を交わした。

彼らは同じクラブだったから、帰路も一緒だった。彼らは、あまり話さなかった。I はしゃべりたがったが、隆は反対だった。間に他の者が入ると、なおそうになった。彼らはほとんど毎日、学校でいっしょにいた。

或る娘が気になり出した時、彼女に恋していた。彼女はしゃべる時、笑顔が楽しそうだった。気づいた時隆は、彼女の全ての注意を自分に向けさせたいと、思っていた。それが募ると、彼の心を知らぬ彼女の笑顔に失望した。

彼は手紙を書いた。彼女の視線が、自分だけに届くように。彼女の声が、自分の耳だけに響くように。

数日後、彼女は彼の席のそばに来て、見開いた目を向けた。彼は、あわてて俯うつむいた。それから、彼らの間を互いの友人が仲立ちした。隆は背中を押されて行った。彼女も、引っぱられて来た。四人になった。話はずんでいる。ただし、二人だけ黙っていた。

「ねえ、Sちゃん……」

友だちの言葉で、返事に困った彼女は、両手で顔を覆った。そのまま、泣き始めた。今度は、隆がせめられた。彼は、彼女の涙を見て、いつか自分もしゃくりあげていた。友人二人は、あっけにとられて見ていた。

流れ出すと、容易に止まらない。隆はIの家へ行って、暗い路上に呼び出した。

「どうしたッ？ どうしたッ？」

目の前で突然ベソをかかれて、Iは困り果てた。

Iの家族は、隆を迎え入れた。彼は、それでよく泊まった。そこにいると、新しい、くすぐったい心地がした。彼がおどおどしていると、Iの父母と姉に笑われた。それで、堅くなった心がとけた。彼は、この家になごんだ。けれども、ここにいる後ろめたさは、ぬぐえなかった。それで、自分で言い訳した。

『ちがうじゃッ。おらが悪いんでねえじゃッ。お父ちゃんじゃッ。お父ちゃんのせいでじゃッ……』

Iの家を出る時、彼はいつも丁寧にお辞儀した。

隆は、遠くへ行きたいと思った。

兄が帰省している春休みに、彼は東京行きの汽車に乗った。旅費は友人から借り集めた。

「そうが。気づけで行げなッ」

「うん……」

言われる度に、彼は笑い返した。

友人宅へ泊まりに行く、といって家を出た。汽車に乗り込むと、むやみに鼓動が早まった。汽車は、ズンズン進む。彼は、窓を流れていく風景に気を取られた。

数年前、親戚の家へひとりで行った時、父がホームで見送った。その時も、父子は互いに話さなかった。隆は汽車に乗っても、窓の外に立った父から視線をそらしていた。

それが、動き始めた時、チラッと父に目を走らせた。父は、コートから手を出して、笑いながら軽く手を振っていた。隆は、瞬間、ポカンとした。それから、彼も急いで手を

振った。父が見えなくなるまで、窓に顔をこすりつけて、そうしていた。

その時のことをぼんやり思い出しながら、景色に見飽きると、彼は東京の地図を取り出して眺めた。まず新宿に行こう。そこから親戚にでも電話しよう。ただ、そう決めた。

赤羽で降りた。新宿へは、そこから近そうだった。電車というものには、はじめて乗った。しかし、いつまで経っても、駅員は「新宿」と呼ばなかった。なんだか、同じ所を循環するだけだった。しだいに不安にかられ、彼は乗客を見まわした。彼らの表情のない顔は、皆同じに見えた。どれも、不気味に映った。隆の席の前に、短いスカートの女が足を広げて立った時、彼は思わず身を縮めて身構えた。

彼は電車を降りて、夜の赤羽に出た。それからすぐにタクシーに乗った。

「新宿駅へ行って下さい」

車の窓から、都会の無数のネオンが、流れて見えた。彼は鼓動の早まるのを覚えた。運転手の中年の男に幾度か尋ねようとしたが、声にならなかつた。

『どっか休むとこ知りませんか？ ぼく、くだびれたんですが……』

しかし、隆は疑われるのを恐れた。

「はい、おにいさん、新宿駅だよ」
出ると、彼はとにかく歩いた。だんだん急ぎ足になった。

『なんとかしよう……』

駅に入ると、コインロッカーを見つけて、まず鞆を入れた。彼は、人ゴミの中に立った時から、補導員の存在を意識していた。

『立ち止まっただけは、怪まれる……』

すぐに、また歩き出した。頭がのぼせている。十六歳の家出少年は、まっすぐ前方を向いて、胸を張って歩いた。顔がこわばってきた。歩調と呼吸が合わないの、時々途中でひっかかった。その度に赤くなる。脂汗がわいてくる。構内は広く、人数が多かった。

『どっか、泊まる場所ないかあ？』

赤電話が目に残って、救いを得たように近づいた。十円玉を入れて、二・三度でためダイヤルを回し、受話器を耳に充てたまま、ポーツと考え込んでいる。

『どうすつかあ？……』

知人に連絡する意思是、もうなくなっていた。周囲の騒音で、心が高ぶっていた。ふと電話の端に捨ててある数枚の紙切れに気づいた。『電話してね。マコ』とあり、番号が下に書いてある。彼はそれを、しばらくジツと見つめていた。番号まで暗記してしまつたが、手にとることはできなかつた。それから、家のダイヤルをゆっくり回した。呼び出し音がひとつ鳴る。彼は反射的に受話器を置いた。

『今でなくてもいい……』

彼は電話から離れて、また歩き出した。両手をコートのポケットに突っ込んで、前を睨みながら、大股で進んだ。どの辺を歩いているのか、どこへ向かっているのかは、知らなかつた。立ち止まっていられないので、ただ歩いた。顔がむやみに熱い。握つた手のベトベトするのが気持ち悪かつた。全身から噴き出た汗がすぐに引いて、肌寒かつた。立ち止まるのが恐かつた。行き会う人の目が、皆自分を見てニヤニヤしているようだった。所々に尻を下ろした長髪のグループが、こちらにニヤけた顔を向けていた。

『なによおツ？　なんか文句あつかツ？　おらツチャンと用あつて歩いてるんだじゃ。おらツ忙がすんだじゃ……』

彼は、時々左右を睨みまわした。

進んで行くうちに、前方に出口が見えた。彼は横には曲がれないので、そのまままっすぐ駅を出た。出てからも、前へ向いて進んだ。通りも、賑やかだった。隆はラーメン屋が目に入ると、吸い込まれるように戸を開けた。中は、狭く汚れていた。客は、彼他に二人いた。彼は二人から離れて腰かけ、ホッと息をついた。若い給仕女が近寄ってくる。

「いらっしやいませ。何にしますか？」

「ラーメン……。あッいや、タンメンにしてください」

やっとこれだけいって、もう一度あたりを見まわした。調理場から湯気の沸き立つ匂いがしていた。彼はそれを嗅いだ時、列車を降り立って以来はじめて心をほぐした。

他の客に視線を走らす。二人の男は、それぞれの事に没頭していた。隆の近くに座っている中年の男は、白衣を着て、店員風だった。坊主の頭まで真っ赤に染まっている。卓上にビールの空瓶が三本あった。赤鉛筆を持った手がしきりに動いて、競馬新聞が赤く塗られていた。その間にも、空いた手でコップが持ち上げられた。

この男よりも、その向こうの六十格好の親仁に、隆は興味を持った。おそらく、最近顔など洗ったことがないに違いない。薄いボサボサの毛髪に、落ちくぼんだ目と無精髭が、顔全体を汚く見せた。それで、着ている古いコートまで、哀れっぽい感じを与えた。なによりも、男は終始あたりを気づかないながら、酒をチビチビやっていた。そして、給仕の女がそばを通る度に、おずおずした目でいつまでも見送っていた。

隆は、箸を動かしながら、何度もこの男を見つめた。そのうち、給仕の彼をじっと見ている視線に気づいて、テレビの歌番組に目をそらせた。

彼はスープを飲み干して、大きな息をついた。店の外の喧騒で、テレビの音が時々弱まった。彼は、ぼんやり思案にくれた。

その時、後ろから声をかけられた。中年の男だった。男は、落ち着いた身ごなしで、彼へゆっくり問いかけた。彼は、はじめちよつと身構えたが、男の声には彼を安心させる響きがあった。彼は聞かれるままに、素直に答えた。

「ふんふん。あんたア東京は危ない処だよ。悪い人間がいっぱいいるよ。うまいこといってしてこんな処来るなんて危あぶねえなア。ホント恐い人間いっぱいいるよ。うまいこといって

人をだますんだからア……」

男は、物知り顔だった。そして、説得的だった。隆はあまりしゃべらずに、黙ってぼんやり聞いていた。それで、いちいちうなずいていた。

男の論しに従うことにした。彼は、男について店を出た。男は、歩きながらも休まずに話し続けた。隆は殆んど口を開かなかつた。

電車に乗った。夜の喧騒とネオンの街角から離れた。隆は、いつかしらまた緊張していた。

再びラーメン屋に連れて行かれた。男はビールを注文した。彼はコーラを飲まされた。男は、しきりに店のおやじや若夫婦に話しかけた。それから、他の客にまで声をかけた。おやじは口数少なく受け答えて、時々チラッと隆を睨んだ。

「おやじさん、おれのこと知らない？ あそこのマーケットで働いてんだけど」

「さあ、見かけたことはないねえ……」

男は早口で多弁だった。

「いや、もつとも、おれは店の奥の方で焼き魚売ってつから、見えねえかもしれんねえ

なあ……」

それから、男は隆との約束通り、店の電話で調布の親戚へ連絡した。

「……ええええそうです。いまここにおります。かなり疲れているようです。いやあそんなことかまいませんよ。ただよく言つて聞かせたんですがね。はあ、新宿あたりで、ひとりでブラブラしてたもんですからねえ。お兄さんあぶないよ、ここはこわいところだよ。悪い人間がいつぱいいるんだからと……。……ええ、それじゃそうですね。ええ明日朝八時に。はい、お渡ししますんでえ。ええ、いやそんなことかまいません。……はい今夜は遅いのでこちらで。はいはい、えっ？ とんでもございません。そんなものいりませんよ。いやいや、そうじゃなくて、はいっ、わかりました。いえいえ、はいごめんください」

隆は安心した。電話に出たかったが、出たくない気持ちもした。

部屋へ行く前に、男は銭湯に寄った。暖簾が下りるところで、客はまばらだった。隆は脱衣場の椅子に腰かけて、男が出るのを待った。ガラス戸の外の庭に目をやりながら、ぼんやり思いにふけた。時々胸が高ぶった。彼は明日のことを考えた。迎えに出た時

の親戚の顔を思った。しかし、湯につかっている男を信じ切れなかった。マーケットで働いているのは本当だった。男の部屋はその二階だった。

「シッ。静かに上がれな。ここのおやじが怖いやつだよ。見つかると思鳴られるから」男は、びくびくした声で言った。二人はこそそした足取りで階段を上った。ところが部屋の前で、ステテコ姿のおやじに出くわした。

「あッどうも、こんばんは……」

男は深々と頭を下げた。隆も下げた。

カチャリと音がして、男は部屋の中から鍵を下ろした。中は乱雑だった。男は人差し指で口を押さえていた。

「大きい声出すな、な。おやじがうるせえからよ……」

それから、押し入れのバッグから薄い紙切れを取り出して、隆に見せた。

「これ、見ろよ。おれの戸籍謄本よ。なあ、ちゃんとしたもんだらう……」
隆はそれをながめた。

「便所はここでしょう」

こう言つて、男は炊事場で用を足していた。隆はむっとした。

男はウイスキーを飲み出した。

「明日の朝は早はええからな。おれもきょうでここをやめるんだよ。ここのおやじと折り合いが悪くてな……。四谷の方におれの兄貴が店を持ってんだよ。あしたつからそこへ行くんだが、おれの兄貴はすげえ人でよお……。おめえ聞いてんのか？ おれのいうこと本気にしねえんじゃねえだろうなあ？」

「いや、そんなことありません」

隆は、半分本気にしていなかった。

「おれは悪い人間じゃねえよ。心配することあねえよ。そりゃあむかしは色々やったが……。いまはいい人間よ」

「はい」

「なあ。おめえなんか売りとばしたって、銭にならねえしな」

男が弱い声で笑つた。

「もう一時過ぎか。明日は六時前に出っからな。おめえコインロッカーに荷物置いて

あんだろ。……うん、そいじゃ床敷くからよ」

男は少しふらふらしながらも、丁寧二人分の床をつくった。

電気が消えてから、隆は靴下とコートを脱いで蒲団に入った。鼓動は、早いままだった。そうやって、窓の白むのを待った。

街燈の光がもれて、部屋の闇まで届いていた。隆は息を殺して、気配をさぐっていた。男のいびきが聞こえた。そうして、しばらく時間が経った。

ふと、男が立ち上がるのを感じた。隆は目を閉じていた。男は闇の中で、何かを手さぐりしていた。小銭が音を立てて畳に落ちた。それから、隆の顔のすぐ近くで、男の小声が出た。小さな電気スタンドがつけられた。

「よおっ。おめえ起きてんだらう。よおっ。金はたったこんだけかよ？ もっと持ってんだらう？ よおっ。これが何だかわかんたらう……」

隆の頬がひやりとした。幅の広いナイフだった。この時、隆ははじめて男の小指がないのに気づいた。

「……靴下の中に隠してあります」

彼は脅えながら答えた。

「なるほどっ、そうか」

隆は、すすり泣き出した。

「泣くんじゃねえよ。隣に聞かれて、起きて来られたらまずいからよ。声出すんじゃねえよ」

男はびくびくして、小声で威嚇した。けれども、止まらなかった。

「ちえっ、この野郎ッ、泣くなっつうに……。なっ、もう何にもしねえからよ。悪かったな。なっ、泣かねえで寝ろよ」

そういわれても、止まらない。彼は息を呑み込むようにして、泣き続けた。

彼は上体を起こして、壁に背をもたせかけた。そうやって声を出さずに泣きながら、男から目をそらせて、ぼんやりドアの方を見ていた。鍵穴から、廊下の電燈の光が射し込んでいた。

彼は神経を集中した。立ち上がって、そこへ走りたかった。しかし、腰が立たなかった。彼は、男に飛びついてナイフを奪うことを思いめぐらした。結局、体が動かなかっ

た。

『蒲団をはぐ。起き上がる。ドアへ走る。鍵を回して外す。ドアを押し外へ出る。出てすぐ階段を駆け降りる』

彼は諳誦するように繰り返し返した。これらが一瞬のうちに為されねばならなかった。吟味しても、最初のわずかの行為に移れなかった。彼は蒲団に手をかけたまま、じっとしていた。

『はあ……おらあ……もう……あそごさ出るごどでぎねえべえ……』

頭の中で幾度も鍵を操作しながら、隆は悲嘆にくれた。

「なあもう寝ろよ。そんな処で壁に押つかってねえでよ。な、風邪ひくからよ。心配するこたあねえよ。明日一番で新宿へ連れてつからよお……」

男は声を和らげて言った。隆が横になると、蒲団を首まで引いて直してやった。彼はそれがちよつと意外な気がした。それから男は、電車の乗り換えする駅を順ぐりに数えていった。彼はそれを聞きながら、いつかとりと眠っていた。

ふつと目覚めると、窓が明るかった。六時半だった。

「おう、起きたか。すぐ出るからよ。用意しなよ」

男が起きて、バッグに身の回り品を詰めていた。隆は立ち上がって、それをながめた。昨夜の緊張がよみがえった。

二人は部屋を出た。新聞の束をかかえた青年が息を吐いて走っていた。電車の客はまばらだった。

隆は黙って男について歩いた。

「ここで待っていないな。おれちよっと電話してくるからよ」

新宿につくと、男はそういって彼を残して行った。男の姿が見えなくなると、彼は歩き出した。肩を張って、最初に足を向けた方へまっすぐ歩き続けた。止まる所があるまでそうして進んだ。

「すみません、ちよっと……」

後ろから背広姿の中年の男が声をかけた。

「何ですか？」

隆は忙しく迷惑そうな顔で答えた。眼鏡の男はニコニコしている。

「ちょっとすみません。ちょっとだけ……。おじさんといっしょに来てくれませんか？」

非常に丁寧で慎ましい。

「……いいでしょう」

しばらくじっと男を見つめてから、隆はついて行った。

『こいつは補導員だな……』

公安室には、四人組の少年が隆の先客で来ていた。彼らは出された菓子をかんに食べ、若い女性補導員にしきりに戯れていた。

隆は中年の男から、矢継ぎ早に質問された。家に連絡され、親戚がすぐ迎えに来るところになった。

「そうするとゆうべは何処に？」

「駅に寝ました」

彼はとっさにこう答えた。

「君はまじめそうですが、どうして家出して来たのかね？」

「それがわからないから、家出したんです」
隆はむきになって邪険に応対した。

「かっこいい！」

そばの四人組が口をそろえて声をあげた。隆は心持ち胸を張った。頬がちらつと赤らんだ。

「まあまあ。はいはいそうですね。むずかしいですね。うんそうでしょう、そうでしょう。ええ、ええ……」

家からは、兄が迎えにやって来た。

「しょうがねえ奴やつだなあ……」

兄は、ポツリとこれだけ言った。隆は吐息をついて、ボーツとしていた。

『終わったなあ……』

汽車の中でも、兄に寄り添いながら、そればかり繰り返し思った。

父は黙然と座って、待っていた。隆もその前に行って、むつつりと座した。

「金はどっからや？」

しばらく間をおいて、父はこれだけ聞いた。

「友だちがら……一万ほど借り集めでえ……」

隆の頭の前に、パリリと一万円札が落ちて来た。

「すぐ返せよ」

父は腕を組んだまま、煙草をふかし続けた。

「おめえいがつたな……」

兄が隆に笑いかけた。隆の目が、雫でかすんだ。彼はじつとうつむいて、淋しく散っている紙切れをながめていた。

学校へ行くと、彼ははしゃぐのに熱中した。隆は、その時だけ家での自分を忘れた。ただ、無意識のうちに現れることもあった。

「隆。おまえは非常に短気だぞ」

授業中によく視線の合う教師が、彼にそつと注意した。

「はい……」

彼は赤くなった。この教師が好きだった。

Iは、隆の様子をよく見ていた。

「隆どうした？ ぼんやりして」

クラブの狭い部屋の中で、Iはしばしば彼に尋ねた。

「うん。なんでもねえ……」

クラブでは、彼は防具を身につけて道場に入ると、気を引き締めた。後輩の指導にあたりと厳しくあたった。

「みんなおとなしいんだもの。おれがオニ役をやるよ」

こういって、道場の床を竹刀でバタバタ叩きながら、後輩を叱りつけた。ために、入部したばかりの女子部員が泣いて、一人二人とやめて行った。

家の中は変わらなかった。

隆は父の前に立つと、我知らず油を注がれた火のような心になった。自然に沸き起る父への暴力心は、ますます膨らんで行った。

二階へ上がって来る父の足音がすると、彼は戸の襖に飛びついて押さえた。

「なんだ？ あがねえな……」

父は隆が中から押さえているのを知っていた。

「なんの用よッ？」

「なんの用って……。なんだア？ タガスはお父ちゃんを部屋さ入れでぐねえのが？」

「そんなごどねえじゃッ……」

彼は急いで机へ戻った。入って来た父は、隆の部屋を見回してから、しばらく無言のままぼんやり突っ立っていた。それからボソボソつぶやいて、降りて行った。

「おもせぐねえなあ……。お父ちゃん生きででも、ひとつもおもせごどねえなあ……。お母ちゃんが死んでがら、ひとつもおもせえごどねえなあ……。お父ちゃんもはやぐ死にでえやあ……」

『ちえッ、お父ちゃんはいっつもそればりい……』

隆は口をとがらせた。

夜中、寝静まった階下へ彼が降りて行くと、台所で父を見かけることがあった。父は細い電燈の下で、手に酒のグラスを持っていた。

「タガスがあ？ お父ちゃん寝れねえもやあ……」

父は顔を歪めて笑おうとした。隆は視線をそらせてそこを通り、便所へ行った。

親子でテレビを見ている時、父には癖があった。父は誰に話すともなく、画面に映る女を品評して言った。

「このおなごわらすは……」と始まって、二言三言目に映る女の性格を批評した。それは主に、けなすことだった。父には、顔を見ただけで、女の性格を言い当てることができるらしかった。それは、けしからぬ生きものと相場が決まっていた。

『ふうむ』

隆はそれを聞きながら、不思議そうにテレビの女をながめていた。

父は、母については話さなかった。息子達も尋ねなかった。しかし、ほんのまれに、父の口から母のことが洩れることがあった。それは、テレビに向かっている時だった。

「お母ちゃんはタツ年生れでなあ……」
ふっと思い出したように、父はそれだけ語った。隆らは驚いて父の顔を見つめたが、それから後は父の口から出て来なかった。

隆がドキツとしたのは、父がボソリとつぶやいた「タツ」という言葉の響きに、絵で見たことのある龍を思い合わせたからだだった。

月に一度、隆らは祖母の言いつけで仏壇に膝をつかされた。その日は魚類も食べさせられなかった。

「タガスう、きょうはお母ちゃんの日だぞう。朝せんこばりも、線香つけて拝むんだがらな」
「うん……」

この時ばかりは、素直に返事した。仏前に合掌する度に、彼は額縁の祖父と母の顔を等分に見上げた。それらは、こちらを見つめたまま動かなかったが、しばらく対していると、二枚の写真が口を開きそうな気がした。

彼は母の写真を見る度に、写真の下につけてある紙片がいつも気になっていた。それ

である日、好奇心から、誰もいない時に、椅子を台にして読んでみた。

新聞記事の切り抜きと書いていたものは、そうではなかった。地域の閲覧誌に、母が書いたものだった。それは、生活を題材にした詩らしかった。彼は目で追いながら、その行間から迫って来る熱に、鼓動が高ぶった。

『お父ちゃん、なしてこいづ、写真といっしょに飾ったんだべえ？……』
そう思ったが、胸の中に伏せてしまった。

七章 揺曳

父は仕事に忙殺されていた。家でも同じだった。隆の反抗的な視線を避けるためとうより、動いていなければ気のすまない質だった。「ああ、疲れだなあ」といつて玄関から入ると、すぐ食卓についた。それも、落ち着きのない子供のように、せかせかと箸を動かすのが癖だった。何をしていても、すぐ次の事に頭を煩わしていた。胃弱なので、軽く一杯だけお代わりをして済ませると、さっそくいつものように三・四件続けざまに電話した。

隆は、勉強のためといって、下宿した。週に一度家へ帰る約束で、許された。しかし父は、隆の下宿に度々寄った。下宿は父の通勤路の途中にあった。隆は、父が当然のようにノックせずに入ってくるのに不満を感じた。

「ああそうが……」

幾度文句を言っても、こうつぶやくだけで、次も同じことだった。

毎年持ち上がる問題として、その頃も、父は学校の事で頭を痛めていた。祖母相手にグチをこぼす時、隆は黙って聞く習慣だった。

組合のデモは、毎年話に上った。けれども短かった。

「さあ、あしたはデモだな」

ぐらいのもだった。

今回は違った。デモの旗持ち役が決まらなかった。

父は、先導者に推された。父は辞退した。

「どなたか他の方にお問い合わせ致します」

と言い切った。

「では誰か自分以外の人を推薦願います」

「いや、それは……」

父は口を鎖した。デモの先頭に立った者は、その筋からマークされた。そしてリスト

アップされた者は、教師の肩書に傷がつくというより、昇格の点で傷がついた。だから、デモは賛成でも、先頭に立つのは誰も嫌がった。

会議から、校長や教頭は当然締め出された。ところが、父は校長に耳打ちされた。

「先生、ぜって選ばれるなよ。選ばれて駄目わがねえぞう。いいが？ 先生、先頭さ立たせられで駄目ぞう……」

長い間平だった父に、管理職の話があった。それで校長が心配げに忠告した。

父はそれを意識した。しかし、父のその事情を知って、悪感情から父一人をしきりに指名する同僚がいた。他の者が指名されぬので、周囲は自ずとそれに和するしかなかった。

「何も、わたしがやらねばならんことはないでしょう。今回は、どなたか他の方にお願いたいのですが……」

「ですから、それでは、先生の方から誰かを推して下さい」

「それはわたしからは、できかねます……」

「だから、それなら、先生。貴方をお願いしたいといってるんです。他にご指名もな

いようですし……」

「……」

父はその同僚に怒った。そして、互いの責任回避で空回りする職員会議に疲れた。それが長く続いた。食卓でのグチも多くなった。

「今回をのがせばもう管理職さつく見込みはねえども、なに、おらそれでもいい。いども、なあんだってえまずう、いつそおれどごばり責めでえ、他の人だづは誰もみんな黙ってんだもや……」

父は、荒い息でまくしたてた。

職員間に沈黙の睨み合いが続いた。といっても、それは父と少数の同僚との間だった。他の者は堅く口を閉じていた。女教師達ははじめから無関係な顔をしていた。一日のはじめの朝、父が職員室に入って行くと、顔が合っても皆押し黙っている。父の肩を持つと見られる恐さからだった。

「ああああ、おもせぐねえなあ。お父ちゃん学校やめっかなあ。……生きででもさっぱりおもせごとねえなあ……。タガスう？ なんじゆだあ？ お父ちゃんやめっかなあ

……」

教師をしてから、はじめての経験に、父は悲嘆した。

「おら……。しらねえじゃ……」

休まず働き続ける父は、丈夫そうだったが、痩せこけていて顔が蒼かった。朝食は牛乳半分だった。それは、長時間の車の運転で胃がもたれるためだった。その代わりに、サルノコシカケをお茶のように飲んだ。

医者は、内臓のポリープを切れといった。また、静養のために一ヶ月ほど入院しろと勧めた。父は、忙しいからという理由で、延ばしに延ばして来た。

そこへ、今回のデモが父を悩ませていた。

「この際、お父ちゃん一ヶ月ぐれえ入院するがなあ。T病院だからタガスも毎日下宿がら来れるしなあ……」

北風の近づく季節に、父は入院した。

隆は、放課後、引きずられるように毎日病院へ通った。

『どうせ、すぐ退院するのに……』

父の病室には、いつも定刻になると、とがった口の隆が現れた。そうして、父の言いつけのひとつひとつに、彼はむっつりしたまま従った。

「ドア閉めろ、タガスッ」

父は神経質に注意した。

「看護婦達たうがあぎれだ顔して、まだああの親子、喧嘩してると思っで見てるがらあ」父の病室は、看護婦室の向かいにあった。隆は黙って指図に従った。彼も、父と自分の家の中をのぞかれたくなかった。

静養といっても、父はベッドに落ち着いていなかった。用事を見つけては、歩きまわった。

隣室に青年の漁師がいた。彼は気性が荒くて、看護婦を手こずらせた。注射が下手だから、痛くてしょうがない。飯が遅い。または、早すぎる。ドアぐらいノックして入れ。

……文句はいくらでも出た。病院を抜け出してバイクを乗りまわしたことも、一・二度

ではなかった。医者の嚴重な注意も聴き入れなかった。夜中、八時と十時の二回の巡回の時、暗い部屋の中に、看護婦が懐中電燈を持って入って行くと、

「誰だ!」

と、反対に電燈で照らされた。看護婦は悲鳴をあげて逃げなければならなかった。

ちよつとでも気に入らぬことがあると、青年は看護婦室へ行つて当たり散らしていた。

父の仕事ができた。

「なにをした？ まだあ何があつたなあ」

腕組みしてゆつたりした仕草で、齒を出しながら青年に近づいて行った。これで、青年の怒鳴り声がぴたりと止んだ。

「んだってえ先生……」

青年は猫顔で、文句の口上を父に向かってとつとつと並べあげた。父は彼をなだめすかした。青年はおとなしく病室へ戻った。それから、彼は事あるごとに、

「先生、先生」

と、父の部屋へ来るようになった。隆も青年と仲よしになった。看護婦等は父に感謝した。

半月ばかりして、父は二人部屋に移った。同室の病人は、横になって目を見開いたまま動かなかつた。

「あの人は癌がんでもう駄目なそうだ……」

父は小声で隆にささやいた。視線が、床に落ちていた。隆は少しハツとして、父の目をのぞき込んだ。

「なに、看護婦さ頼んですぐ部屋を替えてもらうもの……」

「うん……」

毎日途切れることのない見舞い客は、隆の訪れる夕暮れには大抵引き揚げていた。入院以来やめていた煙草は、客の前では口にくわえられていた。

上京中の兄が病室に現れた時、父の顔がゆるんだ。

ほどなくして、スピーカーからよく通る声が響いて、兄が出て行った。

「何だってやあ？」

戻った兄の顔に、父が探るような目を向けた。

「手術してポリープとれどや」

普段でも無口な兄は、それだけポツリと語った。

「それだけがあ？」

「うん」

「それにしても長がったなあ……」

「……」

「家の親戚うちの親父は癌で死んだんだが、やっぱり身内が医者と呼ばれでって、医者がらもう駄目だっていわれだのを、皆でそのごど隠してらったんだあ。それでもあの通りの人だから、ながなが信じねえくて、えれえ目にあつたつたがなあ……。おめだつ皆おれさ嘘ついであるなつて。やあいや、信じ込ませんのさ随分ぜんぶ手焼いだの、お父ちゃん覚おべでるが……」

「なあに馬鹿ばかなごどいつてんのよ。そんなごとなんにもねえでえ」

兄が笑い顔になった。周囲にいた叔母家族も笑った。

一週間後、手術があった。

経過時間は順調だった。隆は椅子に座っていたり、歩きまわったりして過ごした。

病室に運ばれて来た父は、眠っていないかった。眼を閉じたり開けたりして、顔を歪めて首を左右に振っていた。

「ああ痛^{いで}でえ。痛^{いで}え。痛^{いで}でえ。ああ痛^{いで}でえ……。痛^{いで}え……。痛^{いで}え……」

「ご心配いりません。患者さんには麻酔がかかっていますから、痛みは感じないはずで
す。謔言をいってるだけです」

看護婦が事務的な口調でいい残して、部屋を出て行った。叔母が介抱にまわった。隆もベッドに吸い寄せられた。父は同じことばかり訴える。目は正気の人と変わらなかつた。

「ああ痛^{いで}でえ。痛^{いで}え……。痛^{いで}え……」

「お父ちゃん……お父ちゃん……」

「タガスう、痛え、お父ちゃん痛でえ……」

父のすがるような目をはじめ見て、隆は怯えた。

「うん、痛^{いで}つてがあ？ どご痛え、お父ちゃん」

「ああ痛え、痛でえ……」

父の目から流れる雫に合わせて、手を握りながら彼も泣き出した。そうやって、十分ほどすると、父は寝息をたてた。彼は繰り返し父の寝顔をのぞき、眺めた。

「タガスはもう寝ろ」

「うん」

叔母に言われて、彼は病室を出た。ぼうつとした足どりで、床を敷くと、体をまるく縮めて蒲団をかぶった。

十日もすると、父はもとに戻った。隆も、手術の晩のことを忘れた。父子は以前の習慣に舞い戻った。

手術後一ヶ月すると、二・三日家へ帰りたいと父は言い張った。医者は渋々許可した。父の乗った車が下宿先へ寄ると、隆は出るのをぐずった。

「なあお父ちゃん体が苦^{ひで}えがらよう。早くよう。家さ行きでがらよう」

哀訴の声に、彼は黙って車に乗り込んだ。

台所の椅子に腰かけると、父の目が笑った。

「どれえ一杯食うがなあ」

手術後はじめのご飯を、父は一粒ずつ舌でころがすようにして、喉に流し込んだ。しかし、三十分もすると、突然黄褐色の液体を吐いた。それは洗面器の半分ほどもあった。隆はその臭いにむっとした。

それから、父はそれを度々吐いた。

数日の予定で来た父は、翌日病院へ戻った。

窓ガラスに降り続く雪が映っていた。それは地に落ちて、コンクリートの歩道を濡らしていた。病院を足早に行き来する人達が、三階の病室から見下ろされた。通行人は泥

水の溜った所を避けて歩いていった。隆はそれらの急ぎ足で通る人々を、奇妙な思いでながめた。

父は、日増しに弱まった。少しずつ下腹が張って来て、苦しかった。体を横臥せにしたらま動かなかった。隆らは熱いタオルをあててそこに湿布した。

夜中には、眠れずに苦しんだ。眠っても一・二時間だった。昼間は、窓に映る雪景色をじっと見つめていた。

食欲がないとあって、何も口にしなかった。ただ、口にサツパリしたものを好んだ。隆が部屋で退屈していると、

「アイス！」

と、父がポツリとあって、使いにやらされた。彼は、イチゴを買いにもよく出た。

夜中の看護は叔母と兄に頼んで、彼は下宿に帰るか付添い人の部屋で寝た。日々は、霽のように流れて行った。

祖母も出ていて、兄と二人だけで家に戻った時があった。風呂から上がった隆は、兄が先に横になっている床の間へ行った。

「おやじは癌だぞ。もう助からねえぞ」

小石でも投げ出すように兄がポイト語ったこの言葉に、彼は顔を殴られたように感じて、突っ立っていた。その場は静かで、目蓋を閉じている兄は、何も話さなかったようだった。

「もう駄目があ？」

「うん、もう長ぐねえ」

「いづがらやあ？」

「手術した時に、手後れだがらってふたしたのだあ」

「……………」

彼は膝について、蒲団に顔を押し当てた。

外の景色が雪で埋め尽くされていた。病院の前に留めた車が、一日のうちに雪に隠れてしまった。病院に用のある者は、足跡で作られた細い道に沿って順序よく並んで通っていた。向こうの通りを行く隆と同じ高校生は、ツルツルに滑る道を恐る恐る自転車で

進んでいた。

父の下腹がでっぷりと張っていた。長いこと姿勢をかえずに横臥していたために、腰骨が傷み肉が腐って腫れていた。湿布の回数が増え、しきりに麻酔の注射が要求された。父は、もうひとりで立てなかった。

夜になると、隆も父の病室で過ごした。看病に疲れると、空いている隣のベッドに横になった。すぐ眠くなる彼は、叔母ほど役に立たなかった。目をつぶるか、ぼんやりしているか、彼は父の傍でおとなしくしていた。

数時間眠ると、父の苦痛の声で目が覚めた。叔母のなだめる声もした。隆が振り向くと、父と視線が合った。父は、口からしきりに何か出しながら、彼をじつと見ていた。彼は目を閉じて、そのまま再び眠り込んだ。

父は讒言のように、思いつく事を時折淡々と語った。

「おめえだづ二人だけの兄弟なんだが仲ながよぐすねばねえぞな」

「うん……」

兄弟は素直に聞いていた。

「タガス、おめえ、剣道もやってるす……教師になれ」

「うん……」

一ヶ月の休養のつもりが、三ヶ月を過ぎてしまいうちに、父は自ずと悟ったように見えた。

「五輪塔掃除しどげよ」

思い切り吐いた後、ふと思いついて言った。

「馬鹿なごというもんでねえ！」

「そうがあ……」

これはひどく叱られた。父は口をつぐんで目を伏せた。

意識が薄れた。それが続くと、父は仰向けに寝かさされ、酸素がかけられた。時々正気にかえると、誰かれとなく人の名を呼んだ。近い縁者がベッドから離れられぬ時が長びいた。

五・六人だけで見守る病室へ、遠縁の叔母が入って来て、兄に告げた。

「あのな、お父ちゃんの学校の先生方がな、病状が良いくねえって聞いいで、ひと目だけ
会わせでけろって、玄関のどこさ十五・六人来てるぞう。ひと目見るだけ良いいって
ってるども……。何なんじゆすつぺえ？」

「何い？ 駄目だ！」

兄が言葉を吐き捨てた。隆も、瞬間ムツとなった。

「そうがあ。んでえ帰かえつてもらうように話はなしてくるがら……」

叔母が出て行った。

呼吸が荒あくなつた。看護婦が病室から走はつた。

「頑張がんれよう、頑張がんれよう」

そばの者が叫こんだ。医者が注射を用意して来た。目がうつすらと開ひき、呼吸がと切れ
と切れになつた。それから、大きく数回息をして、止とまつた。医者が器用な手つきで、
胸のあたりへグサリと針はりを突き刺さした。隆はそれに驚おどいた。すると、息をふき返かして、
胸の細い筋肉が一・二度ゆっくり揺ゆらいた。

「なんたらなさげねえってよう。ほれ、頑張れ、もうひとつ。ほれ。ほれ。ほれ……」
女達が胸の動きに合わせて、大声で拍子をとった。しかし、五度めあたりで、と切れた。

病室が泣き声で濡れた。無表情の看護婦が、息の絶えた患者の腕に、何かの注射をして出て行った。兄弟はベッドに上がる女達から離れて、見守っていた。どちらも泣かなかった。隆は物につかれたように、父を見つめ続けた。

盛大な葬儀に、見知らぬ人々が多くつめかけた。喪主の兄は、気を張っていた。祖母は来る人達とむせびながら語り合うか、邪魔にならぬ場所を見つけてぼんやり座っていた。隆は台所について、忙しく立ち働いた。

「タガスう、お父ちゃんを柩こさ入れから来こお」

父は白い晒しの衣を着て、巡礼僧のような格好をしていた。蒼白く瘦こけた顔と枯れ木のような体は生きているのと変わりなく、熟睡している人に見えた。ただ、触れると氷

のようだった。

「タガスう、ありゃあ、お父ちゃん髪とがすの好きな人だったじゃあ。とがしてやれえ」

傍の祖母が促した。

「うん」

彼は父の前に正座して、かすのこびりついた古い櫛で七・三に分けて行った。父の体にはじめて触れる気がして、周囲の者達といっしょに、彼は微笑した。

外は雨がぱらついていた。火葬場の小さな建物は、大きい煙突と不釣り合いだった。

火葬が仕上がるまで、人々は暇を持て余した。兄弟はのぞき穴から炎をながめたり、煙突から舞い上る煙を仰いでいた。

「ぜんぜんお父ちゃんが死んだって気いしねえな」

「うん……」

火葬の終わりが告げられた。台を取り囲むように人が並んだ。大きな箆筒箱を引くようにして、人夫が台を引き出した。窓のない暗い小部屋が、一時に熱い空気に包まれた。

人々の嘆息がひとつになってもれた。亡骸が姿を消していた。そばに寄ると顔が煮えるように熱い。台上は、黒い木炭の破片ばかりだった。所々にまだ火の粉があった。人夫がそれを吹き消した。

「皆さんおひとり様ずつ骨をお拾い下さい」

人夫が型にはまった口調で述べあげた。それから、世話好きな人達がざわめき出した。

「さあてどつから拾うべえ？ んだなあ、待ってるよお。皆で平等に拾うようにすねえばねえんだなあ。」

それでは、んだなあこつからこの足のどこまでまずひと組と……。それがら腹の部分を等分にしてよお……」

数人の者が笑った。その時兄が進み出て、低い声で抑えるように言った。

「そんなあ食べ物ではありませんから、やめで下さい」

その声が熱い部屋に浸みて、静まりかえった。隆は台を睨んでいた。

人々が集まって、酒も入ると、一様に故人の人柄を偲んでいた。

「ほんとに世話好きな人だったじゃないあ。先生先生って誰がらも好かれよう……。学校さ行っても苦労してらったようだすなあ。人の為によく動く人だったじゃないあ……。いますこす見でえがったじゃないあ」

隆はぼーッとして聞いていた。

「タガス、タガス、こっちや来。話あつから来」

遠縁の大叔母が彼れを呼び寄せた。

「タガス。お父ちゃんがおら家さ来た時ぬなあ、タガスどご、うんと心配して語ってらっけぞう。おばさん、おばさん、おら困ったでえってよう。何したれえっていったれば、お父ちゃんが、おばさん、タガスよう、タガスのごどよう。何じゆにしたらいがべでえ？ タガスよう。おばさん、やあいやおら困ったでえってな。それこそ泣ぐようぬ顔すかめでなあ。おらそういうごどあつたつたぞう」

「うん。……んだつてがあ。そいづいづのごとやあ？」

「んだなあ。ずっと前だったなあ。おばさん、おばさんおら困ったでえ。タガスのごど困ったでえってなあ。おれさよう」

「うん……」

話は尽きなかった。

父の若死については様々に惜しまれた。父はまだ五十を越していなかった。

「いますこす先生に長生きしてもらいがかつたなあ。たんだあ体こわしてしまったものなあ。今だから語かたつとも、先生も若わえ頃に随分飲ぜんぶんだんだも……。奥さんが死すんだ時ときなにか、おらそれこそ、毎晩飲きみさ誘さどわれでよう。やあいやあの頃はあ。先生きようは勘弁してけろつていってもわがねがったもなあ。まずいいがら飲のむべすう付き合あえていわれでなあ。はっはっはっはっ無理矢理腕引うでひつばられでよう。おら随分連ぜんぶれて歩あがれたったあ。あいづで大分胃悪いぐしたんだもう……」

夜になると、兄弟二人きりで二階に床を並べて寝た。そうした日が続くのは、珍しいことだった。隆は無口な兄のそばでは、心を解いた。暗い中で、眠らずにいた兄弟は、胸から湧わき上がるにまかせて語った。

「おめえなぬ考かんげえでられえ？」

「なぬって……あんちゃんはやあ？」

「……………」

「あんちゃん。聞いていいがあ？ 前から思ってたども聞いていいがあ？」
隆の声がうわずった。

「うん」

「あんちゃん。あんちゃんは……………」

「何よう？ はっきりいえ」

「あんちゃんは……風恐おっかねぐねえがあ？」

「何？ なんだってえ？」

隆はボソボソと繰り返した。

「風よう……」

「カゼ？ カゼって何よう？」

「風ったら風よう」

「おめえ何いってんのよ。ちゃんといえ」

「んだって風だものお」

隆がとうとう低い声で泣き始めた。そして兄の気づかぬうちに、しゃくりあげていた。普段は顔をひんまげてでも抑えているが、一旦それが崩れると収拾がつかなかった。兄はいつもこれで弟にてこずった。

「なんのごったが、さっぱりわがんねじゃ」

兄は黙ってしまった。

「んだがら風よう。……風だもの。吹ぐ風よう。あんちゃん……わがんねがあ？ ……風恐かねぐねえがあ？ ……おら……おら……恐かねえ……風恐かねえ……」

隆はひとりで興奮した。

「おらあ……おらあ泣ぎべそだからあ……」

兄は弟が泣き止むまで構わずにいた。しかし、容易に止まりそうもない。

「おがすねえ奴だなあ……もう寝ろ」

泣きたいだけ泣くと、隆は満足して眠りについた。

「ジョン来い。行くぞお！」

十数農区に分けられた農場は、縦に四キロ余りの一直線の道が続いていた。それは隆と犬の競い合うコースだった。大抵は、どちらかがくたびれて歩いてしまった。犬は用水路で喉を潤した。少し休息すると、また駆け出した。隆は、汗だくになって走った。犬も負けずに追って来た。そうやって、息の切れた頃に、農区の端まで行き尽くして、二本の分かれ路に出た。彼らは、そこをいつも右に折れて進んだ。砂利道をしばらく歩いて行くと、大きな下り坂があって、広い川辺に出た。散歩は、そこが終着点だった。春から夏にかけて、川は透き徹った瀬音を立てていた。

彼らはすぐさま川原に降りた。隆は裸になって水に飛び込んだ。バシツと音がして、冷たさが足から這い上がって来た。犬がそれに続いた。それから彼らは、日が暮れるまで、時を忘れて川を泳いでまわった。時々はふぎけて犬を追いながら水をかけた。犬は吠えて逃げた。小魚や蟹採りに熱中することもあった。そのうち、遊ぶのをやめて、ふとあたりを見まわすことがあった。周囲は、遠くまで森と林が目に入るばかりだった。

それをしばらく見渡してから、彼は犬の顔を見つめた。そうすることはよくない。じつと見つめるうちに、彼はしゃくりあげた。それは、人の見ていないことを確かめたからのように見えた。また、人が誰も見ていないからのようにも見えた。犬は、水の中にしゃがんで、主人が泣き止むまで見上げていた。

「行くぞうジョン」

彼らはまた走り出した。

「ジョン。走れ。走れ。もっと、もっと、もっとだあ。ちくしよう。ちくしよう。走れ。走れ。ちくしよう。走れ。もっと早くう……」